う津保物語

さかの院　五

特別
へ12
4327
5

172

○ソワウノ君ノ二ヨ
○アテミヤ カ
左近ノスソわね
ミケヌノカス三十九六
左近スヽツカノ
左兵衛尉件カケ
右近セウ平ノコレノリ
平ノコレスケ
右二十六ノ表

源ノナホマツ
為京トホマサノ
平ノ只トユ
トチリユキ只ハ三ノ十只ハ
ヤマトノスケ
ナホアキラ　ヤスチカハルチカ
マツトシ　右モ九十六ノ表
○サカノ井ン　三十ノウラ
○ムネハカリシハス正月四十ウラ

○左近かね源ノ中ヨリハ左太トスケナリノ二郎之　四十二丁表
中ヨリ　ユキ二十　中只　中　スミコノ四人中メケリ　四丁ウ
○在原ノ只ハヤスノムスメヲ中只取テ妻トス四十三　三四ノ丁
△巻末ハサカノ井ンガノマヘビロサエナノリ　卅二三
△后ノ六十ノ　御賀　卅四ロ

流布
蒸開下（五 白本さうのゐん五
（三十丁 絆本かんうまーて

かくて右大将殿よりかへりあるじし給ふ。それは御のこ
らん。おほい大将殿もおはしましけり。さるべくのちよみかうての
御給ふ。内よりまかりまでに左大将殿の御門にまうで
なかしらの夜れさうふひのへとう家ありをちうあ
ひさしきえ。さうてからかあたらしう中将の宰にさして
給へよの給へき。へてきこと高せ侍。右かきこうさふして
こうしたよひいれさせまうり給ふ。たいめんし給へ
ひさうて一日あさましくこえひさく。たいめんさ
御かたらひ給ふに、いけをおかゆえうさ侍りなむ。それ
しこまりもことてさせんとてあんまうりきこえ。
源の中納言をかしかりつとのむ

とまかり 一本
一 絹本同
かしかし ハ カシコトニヤ
門 へ 12
流 4327
巻 5
昭和廿四年四月一日寄 高田早苗氏

かくて右大将殿よりかへりあるじし給ふ。それは御のこ
らん。左大将殿もおはします。さくのちよみつくの
給ふ。御よりまうでまくにたゞ殿の御門にまうで
なりしらの殿ばらみなひのへさう宮家のりもてちらあ
ひとまへなりてかうざうてぬ。しゝ。仲忠の家にまうで
給へよの殿へと。へてとこまで。まだ給ふ中将まうてそ
うちしたよひいれそまつり給ふ。たゞかへし給へ
ちかうて一日あさましくこえ。たいめんし
中がりかきいつよなりけれ給ひもそれ
しこはでもえうてさせんとてあんまりきこゆ
源の給はりなからかりふとよのもういたまゐや

門 へ12 號 4327 卷 5
昭和廿四年四月一日寄 高田早苗氏寄

しかじうたにかゝし給ふむハ。なかなかよろしきハともと
すみたく給けるなとの給ふ。らうたく物給ふなとし
給ふ。なからんとかうかくのこなむ給ふ。時くハ守なから
よくせなく。まつりかりふ雨なんともなきれハつよく
くるしん給との給へハ。なとくさハ世間をなか。なからさく
こそしらよ来まりかくなまてり雨なきれ給きむらら
のれかほろ雨ハなし乃きむそや。あかしの御給なかきて
かまりなも雨つきかれたのれなふそ給ひぬやなきは給こ
まふなからなていとこ雨やうなかり。ハなす給ひてこ
かうしなとももれとしひかりて給り給ぬ。仲給の
ちかりし給ひく物し給はれぬ。拙くさらし給てなり

道日つくむハはかむ ニヤ

さくれたくちのさきくハ雨ふらなりと。わくらき物のと
ともつたくしくりてあしてあらせしや。きむと
そなこへ給ひ見。しなきものおくうのふるなか
いえ給ねよや。いさくうる給りのくねなるもとさる
ちひ河まなこの給なりそちてあとまよいうくま
よしつむしとおふなちなくさあらてふなむを
なかうく物のつしとれ人よたりて。こうらるあるん
物いひけなしよかすよ。そわうの君ときそれと
うつと。あくえの御くよさうなぬりつれくこの
おひこ給のめつしてつまなくのそいへ給くあ
るれさくのみハえさや。しなれえ。物しろさきされを

ありて菜よくかゝく給へく
秋萩風さそふに置く白露をいつかいつか物
はありぬともそわかの思よられ折りあらんと
てしみとてまつりられハあてみ給ふもとに去
宮くるまくさくして給へり
いはとても毛のむ袖かゝ秋風の吹夕暮をぞ
くるそるさあて宮の給を
吹くとに草木の川ふ秋風よつきなくものむと
ふそらるしさ蛍の宮よりも
むしのや菜むしくにひかりふらん野辺風まにく
鳴こゑそするハ給へし

さくらの人ありかふとさく〳〵にさく〳〵るを
心ある袖をそし秋ハ御して思ひハ知らん風く
あくとさこそ給

右大将殿日ころなやみ給へれは、さはつかうまつりて
されぬれは、おほろけならすわつらはしくおほしてまゐらぬ御
さかちしけるなん。いとあはれなりけるとて、
見かくれののそく朝臣のよめるたちも
仲忠や、おほかたの世給ひけしうはあらねとしくかやうに
ところて給ひても治くりなし。宰中納言なともとも
正明はいつなきこの月はあるまつよひしめく
ともあなりゆかれ源宰相ありけれとすひしふ
向かひてさりなとくるしまれなりしるかな紅葉乃霧
よるとさるをみむよくくなん
我恋ひて秋の山ゑてりみちぬらん袖より

おもりめてしりみちいとおんなしにうりかりし源仲
綱あさましくされたるとう川へ打入といひしくたりき
表ふかきあやうなしかまへの渉いくをし給ふ事
ゆきさまこ英文のおりあ給れむ人よいきさくつのま
のたくのく志満よりりくえこえたり
さのくふ乃たくのく志満へいうきれともわうたなり
ありれめ里国日そうきれあるく文の済中人々り入とを
おりりうちうかしこちのまとより流くまてく宇くの多
この九元表我るう河の人ちちし給ふとへ者りおうく
れせうそくまて給とれ々くの治むろをそこし
ゆく彼れとし給ひ成河にあ川をいれ中より出まへ公

ちしてきこし給へえおうかれうりうきて蔵物りを
あるほはいよきこし給つるえきえとりひくへ座
を給ひ思ふも治里なとひとうくをあそとをよ
その人乃さ幼かさんとい々くかぞんとの源仲綱の名
えかりはんのつきうるかとうしとうそのひ也あひ
くさと大あんうねくるんか我がみとおひく天我
くくの中あんるとそうりあふりいうくこれ君より
おうくせをすうんはくきしきいわつ中はあれともうり
くおうくを得たろうやおうんそとつれるさとを
と思ひ乃くひくこれ在原乃ちのちとき給ふ
八のさうこいぶはしこもうえれえこそ志てらのそこ給

やうやうくらくなりてまさとまかせなり給ふそてこ
や宰相のおとゝ給ふこの君とよすませなり給ふ。
されハ中の君とよ。いかハわれいましく。桂なんと
うれしさにハおりしましゝ給。さうハとうらくとひとこ
とゝまく心くあへ給つ。おもひ給とゝ侍らくらうも
よ紀伊守なりけるの忘よこれなうきとこの忘くらう物
くらりなとし給ふのこくりつきこえらんとお
給ふ中のとゝ侍らぬ八の君九なかむすめむ
んちらのなのとへなりよのゝ御か中のきゝ
これハつゝきれ。仲頼の君さらてさせんりつれて。
いとこうりし紀伊守してこそこゝろ給ひ連と

わかよそのかの御の君紀ゝこゝしうりとも。人よさきなを
給ふらん庭えとを給まとも。いとゝそこゝかされ。月
こかよひしく心給ふ中乃わか紀ゝとく人うけハ
菊よことあ人さ人りなし。ひとり川よなん思ひ
あつち。心給へおもりていかゝかなん。ほかこふてそこき
ちる人見えてなん。八の君なか紀伊守にかゝれん。月よ給
よなりまての給ひさうそゝこそおもしろけれなにこ
うちかくわさん中ハな紀伊のかまへ仲頼こゝさらぬ
まそもうしきさハいらんとよくしなとらのくいとおや
しさん侍きろみるまハ。世の紀よの中にかくても
やうりなかしと心給へなりしゝ。いかそて八年もうりそう

いふかひなくおぼし[illegible]
[illegible]
させ給ひん[illegible]この世中の[illegible]
よ[illegible]事[illegible]
にも[illegible]やかん[illegible]
[illegible]の中
[illegible]
のまゝ[illegible]
[illegible]して
[illegible]事[illegible]
[illegible]事の
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]八の君[illegible]
[illegible]の給へ[illegible]

いとはしくおもひてまたたもおもひぬべきものなれど
さ。そのかなしくさよも世ぬものなれはさりけるを
つまむくおもひそすなはち歌なむふかくは浅なかりけり。
たゞふかきものゝあはれにうちかけりしなむ人あるも
やはり海そのほとりくわくれうくなむとゝうひにきを
えんじてこゝろしりてこゝそなかりつわこ君なるんよ紀
こゝ海よりとの歌ふかくてみるの心くえりたり歌
こゝ上ハの御わざくひし歌やまと琴ひかれたるにえ。
みせしくあるせいくひく歌をくうれゝたりみてと
歌つねくまびとよしくうの哀なる歌そのうちらで
歌しるみとのふかく九の君なる仁本をしり歌そて。

あれならやまとのうたやまれはこそこゝろせ歌ハなかりし
ヘ八乃君なるの上まうりたるえんりおとの歌て海
ことハ君の御ふつくしきまかんとその歌しらぬかる
そなたとやくらハ月おほくこゝ世なるなるそれさるなお
とゝせそとをふえとやせ。みけるきここ絃しゝ歌ハ
みくしとハ思へとうとおしく多をいそくふみたり
ぬ世をことゝ絃の命をひしさなる絃なるくて歌と海
らぬハ御かりにいそくうえうりハいとへ歌へいうと
き人みをこそうけの事とのハいふなれかう御中
よハなりにまをのこゝまふとまふれかハきてむいとる
しるとまおハいへまてらんやうもへ人まさるなさけれ歌

ひそかの君出てはわかくさくらがもえみ給ふ。
のくる御ふところむすきとうたにことさらこゝのへんべ八の君と
忠をぬかりうつゝものゝやまひこのと給ひまへ
うし。御ことふこくるしきし。思そめ給ふみゆり
こそあかれハえおかしきまかり給ふ。ふかく思
いれたらしく猶おもちさくるゆへんえ。かくくらもそて
あられ給ましうやかなくい。いとれしくそわかなやと
思ひをおやしくた紙えこゝろくちみえてある
もの紙るとの給へいえの君さうぬやうふくれらし
またかくてほとろ風てなか月またりぬ風そくし
くたりむしの哀。御前の草木とそのいさくこれ

紫はいろはさらさむらの花さえ。あえかうの松は乃
とけさ色紙もしうろくのかみうもえこゝろむら
こゝろ御文う。月はもしろさ文箱に。ゆふ人の池
に月のけうつまくに門出ろさ文箱に。八君
ハ御文ひかるやうもてゆ給ふかけて。いとくれのつかして。
まいのはことやうをひさあそせくおそいかに愛
て。ゆこ君うちうえこゝろまれかせく。或ハ文を
右のゆこいとくれりて。こゝひの御らとこゝの音と
かにゆうろくうりうとてたりしかして。或ハ乃文
さうれはふえ。たのゆくこうのはふえ。ひちアれうさ
あそせく。御かくわかくの袖ふれあそせて。いと二

ひそれの君出まして、あつまさくらかをえらみ給ふ。
のくにゝことりさまとおにことうのえん。八の君と
忠あそんうりつまめのやまひこ乃ともこまへ
うた海ことふことくさし、忠そわめ給さみり
こそわかれハえわろまししま見えて。ふくむ
いれくらし様にかまさまへ。うくうらもそて
るうれかましさるやうみくいとれしくそわかやと
出みともおやしくな我きこうくもみそてある
もの我るとの給へハ兄の君さうぬやうふくれたし
まてうくて見てしう画て、ならり月よたうね風もくし
くならむしの紫。御前の草木ともそのいろくこれ

紫ハいろはさらにむらの藤さかり。あえうの松ハ乃
とけさ色緑まりいろくのまみうとれこさむ
こうり海忠り月花もしろさ夕暮よ。ゆふまへ乃池
よ月のけさつまくまろ門出りしろさ夕暮よ。八君
い海文ひかうやうそてゆ花あけて。いくれつまりて。
まいのはことやうをひさあそせておそひまふや安
て。出ること君てうらえこりをさたりせさく。或ハ文を
右兄出ことりくれりて。ことひの御ことゝもの音と
かれ出ることうりなりとて。たりしまして或ハ乃文
さうれはふえ。太の出とくゝてのはふえ。ひちつりきなき
あそせさく。御あくわまくの稲ふれあそせて。いと二

今宮 タツ ヒメ君

御ハラ正ナラン女御ハ正[illegible]ノ大君ナラン上ノ乃ノヒメミヤモコノ女御ヲ云カ

なくおはしませ給ふとかうせ給ぬ。いづれの人か御心の
とゞめくごとまいればせん夜ひとよ女御さぶらひ給ふとき
よけれど承香殿女御まだともいとおかしう御覧す。
の女御(みやこ)は母の三の宮の中のきみの君なし。
うしまいらせ給へるこの御あくがれ承香殿へもひさしく給はで。
まじくしくやとて承香殿いとく給へるみとおぼす承香殿
わりなきおぼこの君がちはすこしひおそるゝなか雨よれ
りて暁(あけぼの)しらむとまぎれおはして給よのときまけ
よれづまへ御中にこの九の君おもしろくなれてみえ給
つゝ三の宮ハらうらうじうめでたう給へしくなりけり。
み給へるものこまやかにてうちけしきなくおもしろ

給ぬ。うちとらへりおもしろくてかきなれやしてこそ
あはれとさるべきを承香殿のうへなりけるかなし
しても。いやましくよそもならぬに。御前のひとりと
まくいとようひなきとうつらひて。朝かれいま
めぐらく。いかめしうまゐらせ給ふ。宮にゐれらる給
おほしめして書つけ給
みかどひまなく宮にかよふとは菊のたおれさせ人かな
見捨あへぬやあなたへかりしとうたれて。故宮の中
ま九の君のこのないたちの御心をめぐくとて女御
給ぬれ君くきりくるれいてさきつけ給へるなどいみて
なくかくなれつけ給。

なくおそろしうせ給ど、うせ給ひぬ。いづれの人か御心の
とゞめくこともなかりせん夜ひとよ女さんうちいときさ
らけみえぐおす絹やうしまゐらせつゝくみ給海ゆ。
この女御乃は母の三の宮の御中むつましき君なく
おはしまいぞれなんこのあるく衣絹かりひきし給ひ。
まいくしくりやうそ。なみなといひく給ひくみとおす絹れ
りうなおくこの君うちいれすいひおそろしき雨よれ
りて、曙りうちとまりあけて給ふいとうけ
よれつきまん中なそこの九乃君もちとくれてみえ給
つる。三の宮いらいかすく給しくらうす。
み給ひくりのものゝこまえて、うちかけさゝくちうち

給ぬ。うらみありおほしつゝまてなかなかれいしまして於
なにとさらにまをひき猶ぼそのさ人りぬなれち
してゐやましくよなかさうしに。御あるのひとまと
きく。いとさくいみえてくうろひく。朝かほのまへ
めくらく。いうめしうさゆりに露りぬれたる給
ひしかりてうく書つけ給
みかひき見露しろきをゆ菊のたれたる人なる
見捨えやまし。やあかなるかしとられて。おもうち御中
に九の君りこのむかしの御法を思ひくとて其れ
給ひ九の君ちくさりしるすれいかさうつけ給へるさとみて。
さてかくうれつけ給。

あてきぬ人さへ出でそよくのぞかれたらふ衣
とも河をとるらんとうらし給ふ八の君をこそとはくなか
ありよこの君のきつきまの人おぼすとみゆく
宮の御乳母の前とみおぼへ人は物やおぼすらんみ
あるは思ひそをきこえる給へるとも世り来給
んくとこそ給へんうらむあ川からくあそひ給
うくもたまかりておよこうら宰人々らゞ君とも
とみか御前に抱きまゐらせんかしの御ゆくさまゝ君よ
らすれよりまなれなりとく御くさ抱きまり給ひ
には宰中納言と大将殿よまりて給へさぶらひよゆかへ
は中納言の君よくあゝ見えんしまうり中納言ひきうしらさ

らうなかりしこと御ゆかしきこえんとくむるしさうてといつる
まの給へるに仰せらるゝことやうんそいひきかぬ地もく平
中納言をまつりかへりとききこえてゐ給へるさまことにうれしくぞ
おほかたことなくうくあけぼのせむとくしん殿を
ぬのよう抱まくそひてくるは見えんして抱き御前
給へ中納言ひとひらし御かゝ給へのいは大将川よ
おとこ中納言のくるまんた大将の御しきえたりきこえさせ
まるうひ給ひむかへるのまつひくるん日ごろいとあ御
かきせまうりて御ものこそ給ふ中納言一日喜びよ姫の
えんきこうめくかにまうり給ひてあよ侯るんの給ふから
らうゆかしくきこえてまつりしるらく左の君かうさ大将

あかりぬ人さへゆきてそくろのかれぬらうふ哀
と中川をこゝらにとゝめし給ふへの君もとらしはかくなる
ゆくよこの君ハうちつゆま人ふすとそみえ
寄りて御簾の蔭とみえ人ハ物や思すらんみこ
あまたりしるまことこゝえし給ふうらみそふうり系給
人くさまれ給ふさんうらおり川ゆらりあわれいは給みて
かくいとおもしかりておもてよろこばら寧人ならず君さら
とみかた御前に物まうり給ひしの御ちそうらず君を
ら打れおつまれならとく御くさ物なまり給ふる
頼よ。宰中納言大将殿よまいりて給へ。さらふくひよ物ん
返中将の君よくあいたえんしまつり。中納言ひさしくさ

かくこそあらしこ御ゆるさこそんとくるむさうふていつる
との給へて。ほせうそこまいんとていかゞあゆかしき宰
中納言まいりあへりときこえて給あまたまこにこれかまき
おほかりこそまことみえくあいせんせむとくゝ大殿風を
のとよゆまつまそひくゝあいひえんして物かうり給
給。中納言ひさしく御わり給ひつみハいかほと川よ
るきゆゆかりくるん。大将のめしにえいあるそたりしこうと
まうひいかりそ。ひめものまうくひくかん。日ころの御
心地まいりて御けしきと給。中納言一日まいりよ殿の
えんさらしめしくふと。まいり給ふなとに侍るなんの給ふゆら
とし。ゆかしこまりくいまうしそまうしらし。大の御かへ。大将

面をつゝこそさらにさとしらんで、ものめしよせり。こゝろく
し侍さゝ川きよふのたゞよりのあそん。右中弁
これふさの朝臣(わそん)、式部さいしきんしをさるゝんめしよしみ
川の袖よりも侍るやまとりこゝろみとさせ給ふ。大将ぬしぬ
しいとうらさくのとおもひくらりおもんまうりし。さうしき
いかうときさらんいくへうらうき涙のこともかうこさおもふつゝひなり
らしく御給ふ宮その上ことゝも。いと袖ふさもんまりつくりて
御給ふざるくその日おのぽく人りさいとれなりうゝさ。大将さ
まあらそをもむ。侍さもつゝしかやとの御給。中納言
いられ給ふまれうかしうさくゝ。いかうかる事めらるきむ。
中納言、一日ねいゝくみもおあることわいざれりまうく侍い

給へるみこのゝ侍りてせ給ひぬかきりなくしきさみん
と。これかまことや御給ふつゝくり。侍さもとさるれんなて
まよおやしくまつり給ひぬいすやみ給ふるまや給
らむと。まめうしきこゆるいんつけのこや。むかしさよみと
ろき給て。その侍さとれの給ひいるとこ御給まそと。
聟をきこえらでの給ひけり。右大将若少れこや。わま
うこれなまいとあやしくとおぼえんとまた右言文
ちとあやしと申りしうるふたの文いと言いくし
きこゆれども、しまうへきやむとるさい悪のみのとう
まんふくふかくまいる人かたまへいまして右の一度り
ていみじくそ給ひてかく給ひにたまうるむかしかな

取りつぎこゝにもちろそしてあんでもちゞめしもちりけるこゝろく
し海さん川なりとふのたいふたゞみのあそん、台中弁
これ紀の朝臣ぞさいえんしよくるんめしくらりしひ
かう川の抱とゝ海うまくまゐりきまとく戸給へねれぬ
しいとゆうそくのもとねくゆくうるんなり。さてくぞう
いつくさるん人は、紀の給のことあめうきゆくいたなり
さしく戸給ふその云ことを、りと抱なうんまりきをて
戸給ぶさくその日あぷぷよ人りさつれなりきし大納言
きみうきましく海さうくりやりの給。中納言
いつれもさるれなうしあさくいゝつ手すみうき
中納言一日にいくみとあるまいばされまうく海い

戸給つみぞの海いせ給ひぬのうらくしきあん
と、これより戸給ふつくり。海さとうるんみく
きすよおやしくまり給ぬいすやみ給ふすや海
らむと、まうしいらいんうけのこや。世海さよ神と
ろき給て、その海さとれの給とりそと給ふすそと。
契をもちらての給けり。大ぬ先やわま
こうれつまゝいとあやしとまくかさとれよ云交
色いとあやしと思ひうろふこの交いとさうし
きすいきしやうくへこ、やむとるさいゆ乃みのとう
まへふくふぐけいさうへいまして中の一面り
て、いくよもそぞ給んうく侍うたうかうむめ大

たねの朝臣をおそれてそゝのかしまつりたり。天
下よそのたねをすゝそしよ川をたいまつりても。
中納言のうへよりかゝさくも人のためにハ三年ふ
たるなり。たねいふくりれあしてかつりもあらえ。
ほそむのすゝとたえんいをせられえんたま人ハ悲
えきといとおやしと思ひして。そもこのたねハ
かれの霊かたてし海をもん此これおそむよいまう
あそういしきいをいとやかんとすく待られたねの
このくよほくろ姫いよるもあさらうるうへりて
あんねとゆふみみおやしうらく善哉ものたね
このくよあくるむをあいはそくりそへひ給く

民アルハ五君ノ吏
エモノカミハ八君吏
清正十リ

道日るうしハ為ちう

む。これはこれはなかう。いとうしこてるくつまて
とかうしえをく人へまいるを。さて拶あ重よりあれる
う海へてあんいいてむくなりとや給へて。善哉いふ
あるゝふうあらむとハゆかりあうしきるかうそい賤
いた悪つ贈るこも。みかとめつへきそりしてあるれ。
まして人ふとさうしめしもくさうしたけ紙いと
おうしみかりての給ふすうとや給ふみ人あや
しうを給ふ。民アるおとうかみるとう海をね
かんく十の二とよ重中とにいとれてあるて
とくをゆかりく給ひうるとゆ給へいかのゆくあまし
ゆへいけくものう海のへくいとれりしくわやしう

たちの殿をあくまでそしりきこえまつりたり。天
下よその大将をすそしよ川たれいまつりても。
中納言のうへはやうやうさくも人のうらへは三年に
ちあるなり。大将いさくうれあてくつうをあらえ。
はそむのするとちえんいをせちりちしたまへは衰
えをいとあやしと思ひて。そしてこの大将りは
うれの霊かたちて滴るとこれあそむよりより
あらうはしきいをいとやゆんとす。給うれ大将乃
うのくよはうる姫はあさらうかうへりて
かんねとやよのふみみおやしうらて孝をとの大将
こうのくよあふるむをあはいぞそうりそうへは給へ

も。これはされれはなり。いとうしこてあてゝつまて
たうらうしえをとる人のましとぬさて捨あるまうりあはら
う御つゝかんいゝともをく給とや給へん。春宮は
かうらあるむとはゆりかうしまたりて式部
左大将隆るきとも。みかとのあつ人さえりてこそあられ
ましてき人にもきゝかめしもくさくかし。たゞ紙いと
おかしうたとゆりての給ふことやと給ふかな人あや
しうを御こ。式部の君をとそうとさらゝし海をね
かさ人とく十の君をともとしたれる。いとはれこあるて
とくをゆかし給うをとや給へいのゆかしくあるらし
まいらけくまのいなつく。いとれらしくあやしう

つまうちもとられこの侍ものはのこさすつぬ人
また、たゞ海へなといひとゝまさなく侍るハなかるへきも
なふ給之もの、をとこ人しちよわれよものゝ海
ひかりかお、お風しろ中にそてよしハ給ふさく中
納言殿かくまいね、ゆく中納言うりもの兄人し
まうりきふくひふく中将のかへこいめんし給へ
あまりて、ゆうこもいかとゆかりくさふくし給ひてでおお
かくとよ、源侍従の君ハくいつ飛さ申なけたま
ふいとくもひしくゆかしくかれえ、侍従のかなもとく歩
のなつよハ海なとうかゆへいつかハ秋をとれいて
め飛、ひとぬえてそのもにつく

アリキテアカシキ所之此十四言ナシ

ゆきふしいかくとまらなむと秋たち
ふをいそくとくらん、おほかひいはりくかくとれ
てうせまりえ、九の君
りつゝもにわしつらもくされいなれいはのい
てぬ物をたふるふんかうかもとそかちまとくて
なり給、侍従されとそいまひのかれとゝなて給ふ
のゆく九の君たつしまほにこうつくゆかりくさふ
りてゆき海さつのかふ河ゝよのゆかりいゆくゆき
しかさ恋くわりさくたつさ恋くころふと物
出いくらまつ哀とゆ月ゆうとれり

のみせて大将殿より　ろうは宰京ふ

まろうどとも、これこの侍ものいみのかたにこもりぬ人
よ。たゞ海はまことにをさなくて侍るはあるらんとも
きこえ給へるものをと人しれずよろこばしきものゝ海
ひかりかゞやかしき中にあくがれて見えし給へる中
納言海くずれぬ。やがて中納言のうしろ見えんと
まゐらすふしぶしく中将のうちとけめんし給へる
ありて、やがてこそいとはづかしうふりぬるてであるが
かくよ。源侍従の君はいつ殿上人をかけたま
ふこともひとしく、やすらはれたる源宰相のかたのこゝろも
のあるよ。海はまことにめでたかりける秋とかれいて
めでたき、ひきかねてそのよにうく

アリキテアカシキ所之此十四言ナレ

やうやうしいたくさゝまぎるゝとおどろくさま秋にふかう
かとしのそくそくらんおかしきひとしはくもとし
てらせたまふへ、九の君
いかにもにほひつゝもてきこえぬるおもはれいかにのい
てねびまさりて、ふかうなんかのかなと人そのかみをそへて
まゐり給ふ侍従これそそのいりかひけれとうちさいて給ふ
九のやくしの君たちてなにのてうちはとあかくさうふ
ありてゆきの海さつのこゝに侍りのむかりいひとくわか
しりさ所ぐむかりふくだりくさし所ぐしらうふと
いでくらまうく、家と出ゆうとしけり。此は宰相の
のぞせて大将殿より

捨遺ヨミ人しらす
ちかひてし世中をたのみしをうらめしく...

かくはへいかにいひても
一本のうつほて
一本同

さるへきことこそ侍られ世中をおほすれのみ
さりかたくてとかくさためあへることふかれぬりの
かくかくしてそまかり給へあこ君やいとくるしき
わりなきことせさせ給ふとかくなくそまかり給へるを
おとこ君はかの上にもいとせさせ給ふなるもこそ
うらしみふさ思ひなくこともなしいやおとこ君との
わらしとおなしのよにいてりかれくしくとふそこ
給へておほくうちむすしてうつりなりせさせの
くるかえんとれハやくしうやさいふんとくおと
つひつれなかりふそこのしのかへなかくくるくこて
こ海つれたりさくゆきのもつひかりいやおとこき

かの浦へおはしたとて
一本のしるしひてみ
一本同

行正
ありつることともそ申されせ世中をおもすれのこ
濱貝
さうらはすくて、とうゑくゝ文をあとゝゝふこれみりの
おもくわたくそてゆくりゐへあて君や、いとくとのゝを
あしきせにせなうんとうゑくゝそてまうりゐへ里文
長洲
川辺郡
あて君ゝゐゝ、ふ北のかたにこせなうりゐくゝ、ふしてを
うきしまゆふき風なくこともなし、ころやあて君よ代さ
ひさしとあやまの、たは代いてりかれくゝんとぞさて
ゐへて、おやさうぬすむてうりしかふとかこせおふり
正頼
母宮
罷
うるみえつんとれハやくろうこやさいあんうくなり
つらかれゆふそうしゝのこみへなそれとくゝこうてし
よ海つれたり、さくゆきゝ申にうへひり、ころやあてこゝ

こよひかへりて、やつし給ふこのことはのこまやかにいひつゝ人よ
こゝせなれとおほくつゝもあまたんめれは、まつをいとゝり
みくしとおりさゑんもゆくゆくにしさみえこのれを世ね
ちるなんむしつとめたきとて、のこり給へ
あこ君あひもえぬ日のあまく姉の袖よりは人のおとこの
あはれへきされは、いとひさしや、やくとうちそ屋かつ
ゆくさきうれしとて、神無月かのちらちる紅ぬらし
ていそきくまぬれとくしさ海のおもへ川まろ時
あくみひなけく秋の夕暮おもくしく月かすし
うさよこへ一人すみわたんともなよまろ川衣になる
しくかりてなすさぬ給へまへん。むかしさ此その袖よ

すゝしかりて、心ほそかなんとよつまでおもはれける
さしもなれなく、それにつけ給
と給く屋の衣の袖のなみだよこほりのおと
えはくれ給ひのかいふとめつゝにあんさ給いは月ろ
ひよきりやとりくなかり給ふ事はれの御かり
して衣しやさこ海の宮へまんきつくれつゝ川け給
袖よりてこをぬれうちいはくらいへきの
うこ給文もちゐんさ心もまのくにとのうしをたかね涙
そのかとえし給ふ文字中納言殿よりふみ
ありいは
秋のよるわむさ海よあくかりくさや家とう

ウラミ又ハウラニスカ

第正ニやかうハ右大

らうあはくさそへられ。たゞなる人のかれなんとひとさ
とくなりぬる人ましと。涼ふさおほしうて。これ源宰
相これものみならずこれはいたくくこれ君はおやう
なるくやうくさとりぬ給つらん。ゆくりなくやさしう
てやかの君はなれくしきまいりむすとしうられ
御供をまいりてこれさとしく給はく゛くさりひとさし給。
左大将殿らさもさ給宮しらをかんとさし給ひ
けりゆかしきられとものすくかんらけと衡りのやう
をおくもの゛とらくよしてそいとりもくゆかしきを給
なんなれ
藤(ふぢ)つぼ
藤人もさしのほりまゐとゐらくりてくさとものゝ十(とを)まち藤

のちりれもまいくいとさしくく給人まいとも涼ふさほど。
兵部卿のみこもかいくさくして給まいと。ゆかなり
けすくゆきさく宰相つくく衡いりてや。ゆかしきこへさ
とく
とゆかりしれきゐ給やなふそまかもいらおかせんつを
ところへ人もゆかりなんとさしく給つれん。九の君
みのれくらり
とし宮へ松いられて仲忠いりて給まいくさき
ゆかとられかもこゆかそ衡ゆか給ひ
おうらへの給いそよりしまかのよころくおりの時いこ
の御前まて。こよひなおそいまさし。さらんさへさう

らこめ、おほくさそかけれ。おなじ人のたのみなんとひとつ
とくとなり給人達と、御かたかたうかして、これ源宰
相これよのおほくのとれいくとこれ君におなやう
なとくや、かくうちとりお給つへん。かくるやまとりなさう
てやれの君よなれくしき中将のむすめとうられ
女御とあつて、これさこし給ふ人くちとりひとつにて給、
左大将殿こうきも御前ことをなんとうして給ひ
けり。此よしきこえれとも、かひなくなんうけて渡りのやう
ともすくとのとも、くよそそのほりしらく此頃ことに
なんなれ
殿人もたけ達女ところうちとうきてものる十の君

のちうれまかくしとこたちて給人達とも、御かたかた、
宰相の君よりも、おもしろくさとて、后達とも、ゆかり
いかくなきこと、淡路つくし浦いかでや、しすへさにてこ
とく
ともみつけれ、西殿やまふそとおりけりなかにつと
ころふる人もひつかんと、さとて給つれく、九の君
みのれくり
とし宮たち松にかれつゝ、住吉には住まくさこそ
ゆふとのふかれ。との中へそて、なり給ふ御所へは
なりこの御後はつゐりとこれよのまことおりの時には
の后前まで。こんひとおそひおさし。きんとくとさく

ありくらしあそひとして。源侍従の君とたゝ
くらとちかうかく。かうつ母宮とくるまへつきみたち
はなやかなり。さるあひたにつまとなにかれみな経
いらせつれいさらにいもなかにせつまたは。ふかくつ
おそく。源侍従まつらんとゝ給ひつれともおやし
くおやめしく侍られたまむ。なかうくるとかくれ
三八人ものとも。おもすゝろ人々ほめしいつく給へき
ものつき人ゝおもし。さんかうはしなとしれるこゝとも
しめかいほ月さんつり。宮してあつたゝらく。いかにかう
ふとおもといひてよみ中りきゝやくさこのふひ
とりすこた宮さ侍りのあからか。まかりとうかし

侍くねいさゝくていさゝにおもむきちゝゆうかり
こゝしうし経所いひとつさすれなちし侍まは
すむとゝふ。源侍従そをとあかうさに人まかせ
ふむめり。侍よの中をなかうきちくあるをむくつけ石
さふそれさとふかくてあをこのきみをんたちを。
かまりありくものくらりいゝやもめしくもいと
そのしく。いかくるをのふめかしかゝ。めかりきの
めてたふかのく宮つさそさ。されとなきさうり。こと
か宮つりあそひあるそ。九のさことゝさ西殿とおか
なくよいはめとゝあすみ。いつくるかのみちゝ人ゝとれ
ありとさるくさめてとりかし。すれくしきてし歳

右大弁雅カ

とゆくらみてさくらかなれどもいと心よ
くてたゞしきものかなんやおもしろくうちはえに
九月廿日ばかりの夜、風いとさむくふきて〳〵
れなんとは源侍従の君ひとよ物からかなし
ほのしておもの月うちながめて
又こよひしこれをもつ給撰人の紳めしくれ
のうちまひるさとうちらふし思ひてめでてこ
九の君いとたりとなて給ふいて人をなそれるのよ
いまださまなん見けり右大将のさうしふかく源侍
従物うちとも海のまりのことものい
と思ひなえしてさ藤英九月廿日し侍くつかれ

九月廿日ニ伝ル心エ
カクシ下ノ廿丁ヨニ十
月更衣ヲ委レアニ
来ヌ又コトト同レテヲ
本文[今九]初丁ニアル
ニモ十月朔トコソ
云レ

廿丁ト[今九]初丁
ト似タリ

右あるし

源中納言右大将
タツ

まひしまんてあんどれいのあんさらめ、あやしく海いま
給へり。右大将は思ひ給ひす。さうせとものて、あやしさ
まうくいとしらぬをつらせさまみ、源あそそん
あそし給ひ、こともつまりて、これも源物かくてみれつゝ
さり、藤英ならはうりもの給へるのあれこと
をなさいをめぐされのくらひくらん、れ
れハいとしうつゝ、もや給ふらん、たれ〳〵との中
こや宰相ひさらん。それもまさいさうの中納言
こし侍り。源中納言右大将の頼きこそ女子ならゝと
もたいえく給あれ〳〵見て、あんになとひろく
さつう海なう。さていまひとゑふくらへしとをして。

もろくうちみしてさくりあはれとさへいとふよ
くてたりしさるのうりなんめりしろうちあふれ。
九月廿日ころの夜、風いとさむくてしく
れなんとは源仲綱乃君よひとよ物くらうなう
ほしてあけ月のかゝりて
又さむしろこそのみつくり捧人乃袖めしくれ
のふりえのしき。とうちうちふかる思ひとめてこと。
九の君いとたりしとらて給ふいとくきなれきのよ
いかなれなんきけり右大将のきしふかく。源宰
相中将うちうまし給ふとの海のまり。そのこともい
とゆかしうて菅家九月廿日しはくつられ

まひしまいてなんぞれいのうんうちめ。おもくさ海の
給へり右大将は宰相給はす。いとせともなく。おもくさ
まくいとしらてふさつらせさせ給ふ源あそひ
あそし給ふことしつまりて。これは源相中将のは
くらい菅家のふちくりのの給へくのあはれと
もよのさしをめされけれはうちいうれんな。
にいおしうつらはや給ふらん。またほうつくの中納言
こゝや宰相のひさらん。それもまちさいさくなんさ
こと給ふ。源中納言右大将の御兄にそ女子はかく
もたえのくるまれなれともいてなんにとひろく
さりしぬるも。さてひまもふへりへしともなくて。

とのもかゝるよし思ひきこえ給ふとも身にても一人侍
なり。平中納言はさいきのみこはいかにし。又さこそや
はかなし。式部卿の宮さるかたをかしらにかたらはしたまふは
らは給ふ。源宰相はらかにはかなう御心へはつらく
かゝりしとおぼして、かのきこえ給ひし式部卿のきみん
つけの宮や。ものゝしらめ給ひしそこともなくてこゆる
や。よろしきをいけさる人の御かみをいとうさなりしぞ
ゆゝしきれんのおもく思ほせしとあるいぞやうかくそな
ひ給ひあはしき御はらてこそ。まいりて世給ひかめるやさし
をむかひこいひゆるしおほしてこそ。このうちくわ
らんと思ふにも。きみとの世をやこの給ふきこえて

右ハ左ノ誤カ
正頼ナルヘシ
上ノ二一ヨニカク痕アリ

イトホシガリ申シ
ツルニヤ

ゆむまいし式部卿の宮平中納言なとは。いとほしがりし
ときこえ給ふ。かれてなしみなめさいかうと御かた
かんと。いかなくもと思ひ給ふるへ御いぬましけいさい
けく。なにのもなむおほしたるゝまぬ。右大文
あれはおもふ。平中納言源宰相はやつくさの御殿上
人などいはむと思はかくなかりける。右大将きこえ
給ひつまつられはやなきをいさしくまかり給へさ
まつらん。衛門督のかみとうへおとゝいみくまかり所
さとはかならはいはとれかしぬるをまうしつるともなふ
あかりしこまいりつひ給ふ。かくのかきとくこそまき
たてまつり給ふあはきとふことの葉もきこえらむて。

とのゝ御かたにも思ほえてかゝるにても一人は
たまへ。平中納言ひとつとのゝにおはして。又とみくやう
はりて。兵衛の君文さしかくれまゐりかゝるとくらひ
らひ給ふ。源宰相ふとはらせて御返りいはせさる
りてすゝしとおもひて。みのきこ給ふは兵衛の君のみそん
つけのきや。ものゝとゝめ給ひこそことなくきこゆる
や。まれたるをいけさうの人のはかなきいときなるこそ
うしろめたきの世に申せともあらへかやうこそな
かたのかうしに由ってこそまいらせ給へめるやさし
をむかひていふはやうけかゝしてこそこのうちにあ
らんとせよふをもさみそのせともやよの給をもて

夕むさいしやう兵衛の君文平中納言なるに。いとくるし
とおもふまゝにことなかし。みやたちいりつるとおもひたり
かんと。いへまとむとおもひはん御ものおもひさいれ
たくおほえのもとも思ひ給ひたるまぬ。兵衛の文
なれはうへ。平中納言源宰相ねやつきのゝ殿上
人まていまさ思ひたりかなかりけり。右大将兵衛の文
御かへりまつられいとやさしくいさしくまつり給ひさ
まつらん。袖をつゆのころもとへみをいてまいりこ所
きとおほしくいひとれくおもひまいるにつけと大将
おもひしこともいまつくひ給ふ。めくものきとくくえふを
たてきこえり御かへりあるさとりふことのもおへらて。

道曰 侍ふハ侍る。ナルヘシ

うくいすとかやめ侍るなむくさにまかり侍
へらゆき。表文いとふるめんなかりけり。さらにさく侍らう
らむしくまんく一く二くつくりとしにものし
侍るにすかしいやさ比よ乃るよりしれんちる
んとしみとの侍るく。そのふことも見せなりと侍れ
とくいとうしおくさりやしあまうふさて尚ん物たり
の比いひくり。月ころさえしけとおもとの其後ぞ見え
やうゆらむ侍りもうくてえ多のとめつふおも寿かま
ふうハ侍らんかふまうしつままことえ侍しとうけ
とはつりてしるふ。表文いさやさすりにとふしふく
されたるとて、そこくり人く比とくらうるあめて

そのまとハ其のくらよりれらまぬつくしとをさらて
んとそやなれあるしこさ出来せとと左れちら
り。ちうさふうし梅庵にも侍そ。いとおやしさ海
まのと侍見れハさいのくうちつさめくれを侍らん
やいとく。かよちさうひとくくよらうり侍ふとあん
侍り。表文さくもれうりありやうりとこえしは
それをうにあまもされ侍ふそうし人ちれとこえて
とさらうかんらされハさりともとするとの侍
つくちなるあることきうしとさ出わせたり。いとちい
とくあん侍見うちとし人とあつくさうさんとや
侍ふさやいとう其うとやすり。其のけうさふとも。つゐ

よろこひさせんとおもふにとさうしすときこしめして
むこころなうおもほされぬらうてかへさむやすく
てなん。うれしくいさゝかあれとものしたまへはいれ給へ
ぬやうにすむとさうらふ給へ。大将いとひさしこま
つまてさうらふかせりまてさふらひむとなくかく給
ぬ。春宮大将乃かくれとのわたらし給ふかりかに
とりこの九乃君又とりくも、かくしさゝめきいふ
よせよしかしくうつぬかりより。兵部卿宮うつせち
よのさかふくしなひくうりぬめは大将の御かく
こやよろこひ給ふおほしかいかにせよしと給ふ
よ。春宮なむのさるまおうつかふわきをろうをとのさまふ

と。いふよせよしにてやすらふかは海つらせんと思ふ給へく
の侍らまゝうりまふ。宮はれ、いふよせよし春宮にく
まれ給くたるをもく、いたもみえ給へ。上あまるにそれと
あんはすふ。左大将右大将るまとも、さらく人うてもこ
ともかれ人りしそはかれ。それをせらるの給ふ
るれとも、るとこれ九とゆそこし人とられはすへともうち
よいさうくうとのそうひあまふいらくいふ又いま春宮よいはす
くちらしともいらくさまらく人くはかりくさうて給まれ
え。そのしそれといくは侍らちはりつの給つらむ
とはうらけよりるひはまつ給ふんはうくはかとそるれにうた
りやうれをやはらく人は。十人つ海つまてもひとのさとくせ

よろこびきこえんとおもふほどにさうしてものしたまへなく
む。たゞくろかみあまれる。さてかやうにむやまく
てなん。これくいときあれとどまりていれ給へ
ぬやうなむとききこえ給へ。大将いとつてくしこま
まてさうしおほせらるゝ。むかしまうくく給
ぬ。左大将の君くれとのくちらし給ひてかつら
とり。この九乃君又ときこうくも。おほしきこえもいら
よせまいらしまつりぬおもひしり。右大将うせら
よのことにふしつかひくるりめ宮はおほとのゝもく
ろやよろこひ給ふ。あてこそおいうにせまりしとおもふ
よ。左大将むのこゝろもあつれたるにわたらるとのこゝろ

とて。よせまいらせやうすふかい海つてせんと思ふなく
のはかうまつりまうふ。左大将まれ。いふよせまいらせてのこく
まれかくなるとなく。い海ともえんかたらかきそれを
あん出すふ。右大将あいとゝる。まゐりてもこ
ともなれへりしそはかれ。それいとせらるにの給ふ
るれともるをこれ九といひてこしんとに出りへともからう
よいさうとのこゝひ南まふいひていひ又は左大将よいおそう
くるしとみをいとうきうらく。おもひくそこなりぬるれ
え。ものしそれといふは涼とらほうしの給つくむ
とはうしけよいるひ宮し給えんおもくはうとるれ給
りやうかれなきや侍くに十人つて南つまてもひとめのとくせ

かくておほくこの中に一人をハ天子にまゐらせ
ともまろなれハおほくたいの御かたとハいはれ給
みにこそハ此りもめてたくおほえける母上よりハ
かんの君ハ此中にハ年をとてあてなるよりもさかりなれ
まへくらむ女御にハきくせいたてねとさせたる人
ひとせんりもさもうち人ありかく〳〵しかたの御あそひ
かく此よくの女御ハおりわたるを。なかの君かくにきん
こられけしを。さうらいかなと思ひてこちら
女御かく給ふよそてあまりハおはむ人ありをも給ひ
はらうはこせむらといひとたのむらあつさまにかく
給ひくしちやかなる給をまいりへきかくハおはへし給ハ

はなうられこうつう御なつかしさにまゐるとくく御はしも
をはさうけなしてれかしま御か文れつかすして。
とりの給へぞすこりハ文ゆかうねや〳〵の給さそう
られうこはいひやし思ひれ君のこゝやしそこまてこむ給へ
れぎまうんとこらへ給へまいるやむすこともしられ
ひとうやすしくて御まいりうちやうちみくあんかなきこえ
御後そなすう君ら思くとこうて給へくしきまつりうちよう
給つりし文ならうはこそ御ハりらんとも給へつれとい
とひこしく出かし給ひつうかひてこそたてまつり給
わりうなるれまうちうむこやとそとこうハでまこ
こうとる御出てもさきくゆかし給ふれ手しおまゐりハえそ

かうこそあつかはかしこの中より一人ハ天子なれ給や
きもちゐされたおほきかひの女御をとりいまはむ
みにこそハ思ひしをめでたき女御の君の御母ハ
かんなりハ思ひかけぬ事をこそあはれにもさぶらはれ
まへらむこゝろなれハとくせいそゝねとさふらふ御
心せんとも思ふ人あはれしるの女御の
ふかき御かたの御ハけりねうるさまるにみえ給ひん
うちれりしまハうちあはせてからくてうちよ
女御かく絵にむかせてあまたはれむ人ありき絵
はらうはこせむうちおほくらあつさは海かく
絵かくやうちよく絵をまなさくハ思ひなし絵ハ

絵かきらいとらかをうつし給ふ御たちまちとさく御
をいとうけうくしてれりし海に見れてまして
とりの絵へかきいきハ海いかねやうの絵のさそう
られもこれをやう見れとのこやしてこすむ絵へ
れきかうんとさる絵へまいりやあれこるとならされ
いとうるやなしくて絵まいらせやさみくらんやきされ
海そうまいれゝあさくいさうまいらせなくらう
絵つらまいそうハしゝ海いらふんともかへつれとい
とさらしく書かし絵ひつらひうてそまゝまいれ
おゝかす絵あらかりうむこやとゝをゆいてまさ
さうなまいらもさうくゆりし絵にはさもあまいへそ

二月ハウリヲ今九ノ
六又ニハナバタノコロトス

御くわやこのはるかへらせてなとあらし給ふ。文
かやうのまにとなくは例のことかたやをとなふらし
らせそ。みなかりしにも。文かれらは、ふかくしかと消て。
此はこの二月ならりなん例のみとちやなかく
侍まん。それはよくこちてなん。いまあちらしひとなきは
まくてしもなかせのくさまへまてとある給ふなりくもとこ
きこしりれはしぬかしくの君ならこれなかなり給へる。
らく御そて給へるもさらくしとそきこえられ侍る
まへるをいとこともよしてなかうまかりあるのなくなり
きんならえたるかはうちまかれうこの御まへるよ
りのさかりなるに。ゆく中も御いかしうひいてゆか

ノ玉へカレミヤス所ヲ
今九ノ六ニハノ玉へカレ
女御ノ君トス

かくれはもののあはれつくされ給ふ。文かやをとことふかくいへよ
をかしとよみ給ひぬ。めかたとるにかたりしなるけれそ
いふ文それとよむ思ひ給へるにいとゝくちのさまへ
うしらやもとこしるにかくれなまめかしさこそいりのくち
かりへもみえれはえんなるもとにてむやみまえてまかしひ
まる御めやうかりのやうとうくもまうしとき御よ
そのし給へ。文いさやとこしろせれはそ。ゆかかれはおほえ
てあるや一日このくてる御ひしは。さらくなるむかをと
まかやうかりかれとこはなるかのくさまにをといふよ
せまとこの給ふなかりにてゆかへて。やむことなれと
ゆかくらしひるとふなり。文あるれそこの人まうられたう

御くめや、このすゑをつくしてきこえさして給ふ文
なやましきにとこそは例のことゝもやをこゝろくるし
らむをそみまゐらせ給ふ。文なとはえ見えしらると侍らし。
宮からこの二月よりなん例ならすものをかしやまうく
給ましくこれよりこそてなん。いまはたゝひとつにはよ
まうてしもあはせのくさまへまてとなん給ふなるまとこ
きこえられつるぬ、さくのゝ宮すらこそらまへ給へむ
らく御そて給へるもさらくしてそきこえられ御まへく
まを物のいとこよしてあからまくり、あるのやうくり
きんさらゝもとうかく、らまいれうさの御かたへは。
りのさうらるゝ。中くかも御いかしこひいてゆかし

かゝはものゝきこえつゝなりにたるやをとこゝろ文ひとよ
さわしよかり給ひぬ。わかとをとらしなむけそ
いふ文それとなむ思ひ給へ御。いつくいらへくれのくすへ
くしうやとところあからやられなきなにこそにありのくち
かへとなりれ、きえさせもいらへてむやなきてまうひ
まふ御めやうりとやうとうくもまうつきさ御よ
そのし給へ、文いさやとこそはせられまて、せかられはおなむ
てあや一日こそのこ御ひしは。きことかくるむはを
まあやうり。られとしはほうなきのくさむそとよいなよ
せましとの給とあなはりてしおとくへ、やむことなきれん
ゆかしきこのひおもいふなりて、文なりれ、このへきこられそう

かくておもしろの絵ハ人々いかなるとおり人ハかく
ことゝもゝことにすくれたるむねやをとこのいと
しれ者なり。さやうにいはれたるハ後世これ此文
かりそめハ人とおなしく絵かきて書絵ハ人くはましは
文乃ことこそハよしれけれりつゝ世にあり絵かきかな
らくハけなりハなれ人々し。おもしろきなし、おやくにあれ
とおもひの事にてそハるうしやむをしかくてハ猶し
絵ハされと一日もハなく人生せんとするむかしのことま
なかりしかくおほえたりまされ。紙をとめたるに
人のあさまし。いかなれ人をとゝむるの絵ひしいかにや
う後いつせ絵ハ人々ハあさましあれとか絵かゝるらむハ。

オモトニモアエ物ニハヲ
入ニ九ノ七ノ御ガタヨコソ
アエ物ニトス

あらさなれはのかなり。さて又いかにもいかくおほ
にさまへハ絵かきれと海らの絵かきてひと里
かくりこそあま。な絵としのさしく船あまそれなハな
紙おしさいかくそなしの絵かなり。さやハこ乃文の
ほれとそしれ書。文いとやらかたしし思ものた。
さしいかなしん成し出かそ。なそらうさや出すても
とほ人ののよハけなりハほうしかし。女御ほなきた
ゆかしきもハ絵か。さや出んりし此おもくにきさ
里絵もそ。こなさよ人くいかとく人ものこひ
まれくまうり絵ぬ絵えんうちのことうしめぐを
やまんらの出しきうり絵かこうらいともほり。

かくておほうらの絵えかり。いかなるかんとおもりへはやかく
ともとくもぞさこえてとむらやをとこうつはと
これぬなかり。さぬかりしこれをくらし海老て。これ又
うりてそはへ人とあかなう絵かたも絵えんてくはやたに
文乃ことそはさ絵こくりれつまは世わさ絵代るな
らくはけ志るはなるへし。あちらさるしおかなくあれ
とおもりのなとことそはさらしやむしし絹くては物し
絵へされと一日もいらく人まいくせんとるむのくま
ふなりふうくなかはりてそまされ。絵をとらぬ
人のなさまふうくれ人をとるなのはひしいなや
う海ハそせ絵へ人いあまさあれとうらぬならむハ

あらさなれるのあり。まちくかさしはこちみもいつく也お
はまあらん絵かされと海うのかり絵とくひとま
かう有ことそあま。あ絵しくとのあしと絵めま。それはへか
紙りしさなりくそあしの尽まかり。こやハこ乃文の
これわとそしおほえ。文いまやらうたくし思をのたま
ましいるとん物し絵を。ゆそろうをやゆすとは
と語人のよはけなるハ河くしうし。女御河原絵
ゆしやをとまてハ絵なふ。こやなん里ゆちくにゆさ
墨絵とそこるみさよ人くはさとくとのとこゆひ
まほくまるり絵ぬ。さえんくちうのかくかうしめのを
やむへりしの絵くもうり絵もこまらはとや花り。

しゝみ仁人御帳をしつらひてくらゐみなみに
のせらりさりて十一月よなかりて御かくらし
給ふときのきつね給ふ。おもく右大弁のきこさ
のかくらハ志ハせんさまひたまふをとこしよろ
くせんとうむせす。弁のきこう御まへにて
御か時ハいとしいか然しくいせくのらく海さぬ
なとあんやらえへて給らくあ綫れらんうちめ。
いなよしあひくみ給よ。いとものくにかくてもの
うしびさくとも玉思しろうんなもえらひく
拍子とりまとの給ふ。舞のきこ海んさつまつ
きゝく出いしものにとの御せわりを給ふ。御神楽

左正乃おねもくおね日人ナルヘシ

右近つ手 くゑんけんトス 玄蕃

ろく名注へし

十三日せちなつきるすゆめわりもくなをんくのしる
取ともゐゆめしくかをこしよろくせんとまむ
御所そしなるすへ御ゑたらたとのさえのれのおねまること
のおねしもおくに海さまさりろのゑてきさ乾
やしそく海しられ御かくしの乾し人ハたとの乃
せうまの川さ左近衛府のものを。右近のせう年に
のさ。左兵衛府兵衛のもろす統たいしれもとけ
文画お播源のる統中将右兵衛のそけ兵衛とま
さらられくしろせう平のそくよきわりゆかさ
まくみしてうくの世くしてもをひこえんこま
けいそしやもものけらしや海よのそけるを統め給ふ。

うちみ同人御帳のうちにてくらりみやこ
のまへにてらゝくて十二月よたりて御かくら
なりこまや出でやく右大弁のうけこて
のうちらいさいはちやくさゆひ行かねをこうしろ
しくせんとるむ出ても弁内侍うけ出なれう
此お時はいくさいの殿くいせくのちらく御さる
みとおんやうにそへ宮のこなきれうんとちめ
いかよしめひくみ殿よいとものさかくてきの
うらむさとちて思ふうかんなとえくいて
挑まち出ることの殿へ弁のさ御んきちよつ
さく出でしことはどの中出わを殿へは神楽

十三日せくおつきさるすおかれたかくせんくのみ
所さいまの線ゆみしくふをこうしらくせんとるむ
御佛名そのすへて院のおかたさへのおねまうこ
のおねしもおくに御さまとそうのへうこざうこれ見
よそくは御しらけ御くらのあつくへはれよ乃
せうまうりさた兵衛督門をも右近のせう平とれ
のほ左馬尉右京のそうす我たつゆうなれとけ
左内お橋源のあ我すり右馬のすけ右京すとま
さふらひくらのせう平乃さくよとかわりゆさ
きくみちてくうこの世くにてくさひゝきんこま
けようやもちのおけろうや御よのすけるよおゝ

しなののくにのすけなりけるに、まことに三千人のをのこをもちゐて、そのいちのかりには[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
二百さん[illegible]むつけのぬのの三百[illegible]

[illegible]

しなのゝくにはけんねみさかにて。あくに三千人のいのちをも
まそいのあくいさしの一けうりいゆうまれ、これいかに
の光しすくてハ出きやくいのかまりれハ、さかも
しゆかくぢつりいゆうりすむ。それりはみなめく
らしく文をなくつまくづつりさん。さてくうしぬすこれ
れのゆくしもかしれこしえうくまもの
あしらの堂もこのうく給つきぬめくす布さ
光給ふ。ぬのとてひむさしの堂すておくこさ
つましそうつりあおしれうくさ後ひとのうよみを
まひくちくしみれのこまさし堂すてさため
三百さん。ひむつけのぬの三百さん。あん。海んえうろ

よさうの毎えれんそいつひらめ給いあおあしの
まかいう後さうよりそのニ百ん米らたあまり。いよ
のふみ乃物えきうれものも。ふそ備くてここ光れ
くえぞ是かしてそ後うつ海つくましへ里めまさ
てとかくらのきまつせあし給ふ井。この
ね雑木の時もそハをしめ給ふあ。不成のしもいとっ
しこくをうあくさうかめ、是それもこのれのく
らの日家れすにせよあうむかれそうりとく
よハこの井わそこし将をとろ如うこくうれ
をおへからんとをし里りう。ハ給さくさら給
ひぬおうりをさころ。毎んのさこめぐしうさ法

くりてなんとしあはれむよみいひくたるをちよ
ろくもつきて、少将なりけるときえのめくらしをしあ
なりくなりぬ。左大弁のかみなりもとりくれけるも
よなりこれはやむことなき人のむすめにて
ろくなりとなりよらなりせい給へとなりけり。家
いかやつるいりをしてなりけれはめしつかはくなりた
このさきのよをせんとてもこえ給ひてともをれる
していせのさいくうぬめしにつけられしてくね
三十のさかれき、めしたまひけるにはなるそなりを一さ
ねたまひつくるむまをなかられけり。色んれる
ことらもの、はなものなら、はやく文かれけし

またいせのかみなりてまかりけるにおくりとて御
とさかは山よりさくりてまかりければ。日よ
うちへくしもて十一日にほかれけれはいつまかり
とこまつとりもよなりけるのよるかなりて。ぬのかりうし
あくまとしらて、さん殿の御まへよ二ちくまへまいらせ
日暮くらくまりもとはてくゆうりとのこれ人
さらぬかはりよりて給ふれはもはや給ふ君
もうかけ給ふ給ふあつせて八十人らりつくまう
こまはなれは御車二十ちよ給ふれはしかるはひつ
みくつき給ひけるかみなしせさうつくるよう
むらくり給ふさられは人のとかいけや御

もてはやしうんこらめとこら大のれとくれ
大将兼雅・平中納言源宰相・みこたちまで
いの宮中務のみこなとしのびてかはりつゝまゐり
あつまりゆきさかりこて。まひありきとめて
よくぞずなくなつかしてめくらうらうくてみ
かしこく侍りぬ。はかなき人なかんづく女房あるまじき
しめすまりて。さてくのこんとうかめ人つくひれわく
まゐらさくのこどもとも八十人ばかり・女房人
くらぶしもつくへさもくるまみなさけ田はしよ海
らくとこうらうもれとうすみらかゆる海さな
からく殿のまへうらうさあつまりてにゆへ出てきとを

まへのあくはりうちて。そのくにぐにと
おほきのかみふみなしく人なりしくころ
くもり

さりけるをぬかりてしこをかくれとやそう
ちんを御しひをもくらんそくりたてまつ
やまのふるかりと。おかなくしとめしはの
ら我ろ白。ひして我それとまめりてさま
わく。我行りくくなさうれをれ。まくやまか
く我たなくくなさうれの。妻のこまもん
よかれにさくかん
みそくらくわくに。武蔵の京。おとこやしてきよ
はまうそこきあともすまゝてきこえは。むんしぬれをろ
こにはかきて ひく。めいめんし給へと。武蔵のみと
月ろ時く武蔵の京のいけるてり。海いれと。おもるに

さりけれはかくてこそあかれをやそう
らんそゆくへをもしらすこゝろえくうたてあふ
やまのみかたにおかれしかしとよしはの
らねはや。ひとつてもれとものちてさき
かく、我わかりくかさされはこえやすふ
く我たかくかさされつ、神のとまく
よられこえなん
なまめくらかるに、おかの名をおとこやして名よ
はきりそこきおとむまちまはおんしれをの
こにはおしまいく、めめんし給へ、おかのみを
月のみ時く御すくせの名のれけるよしゆかれたおるし

一日モ一井リチリキ 今ナ九
九ス一日モ一井リテ侍リキトス

なくてぞ。はせうそこもきこえさせぬど。こなたのゆかり
きこえけるこそ。あはれなるを。きこしめすらんとおぼ
おもふもくるしきぬと。うちつけなくりとてさんこ
やらでにぞれゐしかれども。ありとうけ給はるまゝに
あやうくしく。おぼしとくへつまく。えうきて。月ころ
ふるなりは。ゐさいんのそばかえ。嵯峨の院へは。まゐり給や
うゐるやみ給ふとうけたまはりしを。いかりたる
まうしにえとも。まう給ぞところなく。はなてくし。
んそよう何の御こころあれば。なかさとさし給
へはみを一日もあるうらさきこうあかれこしにも給
らさりける。もののはかなのぞとりこ給へるやらもそう。

紺本モてし給ト
去リコハかるノ二
言ノオチタルナラン

こなた給ひけり。春宮にも大将殿にもいとゞしくき
いみじくおぼしつゝ。けふもさらにみえ給はざりけり。さ
てもかゝらん。御せうそこも。まゐらするを
むげに御とゞこほりの給ぞ。あさましやかなるなど
さへ人ともたゞには。浄浄をへかくれなどとり
やうんとなうしくておん。いかさまとん御く御い。
らむ。みこころ見て。つゝまうんとさこて給ぬ
つかみくまでし給。みこんくえや乃雪れぐし給し
よ御いうく給うへはをのくうのはかくおちく
たりあなん。ともの御こと給つらく。いかにそやとの不
はまうりや。なやましく大将りけ事のなき給。よく

なくて、はゝせうそこも聞えさせねど、こよひ中河
さへきこえけるに、声はいかにきこしめすらんとおぼ
みちもちかくさへ、かつおもひつゝ、ほのかにうきそなんこ
やうにそれとしるべしもあはれとおぼしけ給ひつまこゝろ
あはれしく、まいるともへつゝくえさせて、月ごろ
みなかりしま、給ひいつよそにみ嵯峨の院へいまいり給ふや
まほなるやみ給ふとうきよ海にうきしと、いはれけりなりし
ましむ、えこそまいて給ふ、そことなくたちまくし、
んそしる川のほとりにこそめれ、さもと思ひし給
へは、みそ一日もちうさへ、こゝろかなはれにも給
らさりけれ、まゐのはかなのをとり給へるかたちきり。

さきこえ給ひける、右大将殿のまへにかしこくさ
いかんをねこしかはみさへうちわたさ人まゐらせも、さ
てこそ、かくれ、給ひさみしうくなるを、るけかな
むいとおもをこうけよの給ひあかりし、やいとさふく
さ人とものたのまは、浄瀧をんくうれなどとくり
やもんとをみつしくてなん、いかさまとんのかく海い
らむみこらるて、ゐよまいらんとさてゝ給ひへ
まつくさふし給ふ、みこんくるや乃賀茂のれば給ひし
よ海はかく御とへは、をのくうりのはおかくよう
なりあはれ人とものことに給ふらく、いかにそやとのふ
へまうつや、なやしく大将ともの年のかくる給ふく

こゑ 道ヨ色ノ誤ニヤ

ふくしのひ給ふそのよしいはれてはなくしてち給
へむやとの御世しらはあまりからあまた御代うて
みしらせしとものこゝろはいかしくはおもて
すこしかしこまことゆゝ事なく給はしてまた給へ
やう浮心とくわ給へとあんおもくしまくしたせ給ふ
きえるようにまことにすんとみえて給へはよみちた
のよしらむ。すことにめつるかへさけ給ふりもへ
いまなしやしにうんともふて給へはいとくおほえ
もしもへはしめは浮心にもはかなめ給ひあすとこゝ
え給ふつへくわや思ふとおのゆくしみえてまう
にはあはさへされとも見へとゝみとゝ出有しつゝして

こ給はきこえさせんと思給ふことかたつれとみて望
もえ見まめうしことゝはらうりまたこえて給へてた
ら給ぬうくて秋ふけまてゆく山にこゝろそひ
りの吉にこゑとも。やとゆきこまはへるそたくはを
しうふまいうそすらうはかりにだつうみゆく
いとうらくそうしも見て秋しらちけくいとくそこち
おなしれゆくほうちめくて葉へりしひもとへく
こしいろの限くのうしてさはおのゝあつくうる也
みなて梅はこしいうんまくさみなあるとはまのひとた
いろの梅の花をうき世給へしはたゝ雨もなまうてん
うしおもむき給く侍しとふとてせちうつはらの世給

サエ名ノリココノ如ク今九十一表ニ在

てもさらにかくもされとうりこそすれみかとさ
らみにも。おほくの人の中にたゝよくてふつくさらう
すりとこ給ふらてこゝかしこ。そくさ
…一つて
…そなく
のかたひとつ。いとこ二三くおそふなりくらうの
ふたへ。ゆき御さまくれみえなりよりたちつれ。おる
しの中くやまとこにおほみねひさ。おほやけとこさう
れし。中宮にまなよちへくいとこ二たくおそひ給ふ
くてみなさいまかりともおとへのさくるつより
の御ほとにのこゝ給ふ。山中ものけへうん給ふいとく

きこゆれはまつりこそれけるや。又ゆえ御さきの御ほとたちに
のこゝ給ふ。あくゆゝしのさへかん給ふ。いとはかなくれとも
まうりくるくれうりのみたまゆふこともありしきもあらく
のはそんなにのこゝろうかれさへかん給ふ。ひとりある
にのさや。中宮となにのさいか給ふ。ともかくもかくれさせ
かん給ふ。おほかたのきやうともかくみたるみかなき
ね。たん殿りきこえされりてくるしの給ふみこ
なれかんとられめ。御みさいえもくみなくみて
いと出けりさいのみやとこらにさゝ御そぬるさそ
みなくて御絶されんくりみなめえもへうれ
く。ありさいは女先者人々ことはもりすくさめられて。

てまうろみくもうれをうりてうすやうさんさ
らみともむかしのひとの中にもよくふりさらう
ありとさ給ひうてきうれこそとまへてくさ
えともよ。むくよかそずひとつれたる海一つく
けりのかしこにみなとのうけなりて。こと
のあそひのくいと二すくあそふ。なかくこくの
ふえ。ゆき海さきくれなえ。なかよりひらつまれ。ある
しの中くやましこと。おはねひて。去あけはここさう
れこと。中将のよおもくく。いと二たくおりそむ給ふ。
くてみなさいまゐるまさると。おほんのむくすうへ
の前に。うれのきこえ給。山中のはくうん給。いつくに

きこえけれはまつりこれなや。又ゆきひら海さの将長なれ
のきこえ給。あつくゆひのきこえおほん給。いつくにおはしまさ
きりつくりけるのいたにかゆふとたりなりくる
のはそんなれのきこえなかん給ひとりあつ
れのこや。中とこなれのさいか給ふ。見えつしめてぬきこ
なん給ふ。わかうさとやとかくれなきうみなをた
ね。ちん殿りきえしられりまして。そのこ給ひみこ
ゆかりんとしちめ。御みかさいそうそくみえくんく
いと出ゆかりさいの中とこ。さきちら。清そぬさそ
みかく河世給。さいのんくりみなぬきくる河
く。あそひい女方おん人らいとりなくさまされて。

こしのさまよくて。みなこゑして◎殿人ともみな
かみえんにうちめてまさく給ふ。藤宰相こゝろなく大将
のさこと御さうしにこゝろよりて給ひく。御まへ
みくに兵部卿のことしねぬ給へり。さいしやうて
りのとも出雨えとて色ならいよなくやなきといひくなり
実いとまの出ほとをすんなるか。ことなんとゝとり
め給ふ。源宰相こゝらひのまゝこれなりえさあめ給ひて。
うこもさるあめ給ひや。宰相のまへのこ給ふとの人え。なか
せくこれあり月り。こゝうりさんほそちへつゝは。
これとゝこゆるそ。なかなくこそいなとあへき
まなとうゐのちみしくいこさんひさつるハなかこそとか

いまとこの九よあさらり給ふむも。なかなくいとまさく給
御まへの声なとゝ。なのかみよらけ給ひりぬなれ。おな
るひし。いさゝ雨りせんなとい。ふ。ゐらりそやらさ
れみくに出給ふなかりい。えてりやいなりといふなり
たゝうつなんなくと一二のいさ給ふ。ありひさふひ
つらふれといとも哀よ。山雨出けり御こしあるとりつと
のさなといひく。おふりいとり給ひなくるうりぬなか
のまかくり。こさんさらなんりの出くれこみとこら。
ちゝうれさうしり。ゐてうりのこうもくてこれ
ゝこなられるく文へとしなかいなくさ作れの御
かつつまゝつんと出いりく。うねくなきれまくせ

コノ賀ノ一コト同シ 廿三 今九 十二ム ニモアリ

蓬下三

させ給ふ御心のうちにも給へく御心もなう
給ふ。明けん年六十になり給ふべかりけるを、思さま
つらんと思ひける。若宮の御ありさまいみじうて、さるの院へ御
なりて給ひてもしろくなりたまふ、いとあやしくて
のかたつらぬ。よの中にいつとなくなりぬるを、かくてゆく
されをいとすくなりゆくなりゆかりける。さるべく
みとみまかりしことのたまふを、かゝるを、くはしく
さ御しうまつり給へ。さとも思ひなりけん。いかなくこのれの
らしてこのことも、かくいひつらん。おほくあはれなく
とくにもいはぬかくにいれめることら給ひておほかりけり
みえさとしければ、日ね のひまくらもまゐり給ひ、ともかくよ

四

御トシミノ一 今九 ノ十四コ

ナホイトノタソ

民部ハ五君ノ夫カ

されしかりしことをもきこえみかへりなん、めすらんと、よろしく
世持ちふうくものしたりけん。かくしてありかのなか
人儀式をもとしけるなる。かくして、つかうまつることをせさせ
給ふのく。法服かくてまつのしへ、いかかれにかへり
給へ、それよりまに給ふ、御まへのうちにさむらひかくて
御いのちくらへつゝとのへさせ給へ、かくしきまへの中
いみしくいかのよこそいひなくてつけくまつりて、又まへのかたしく
のをしつ。殿も心もとつきまうし、とにかくにつけてうちにさ
給ひて、いとそれ給ひつゝ、御心にうちに給ひつゝおほくいかゝ
とかやさるかくてるのいとおやしくさせ給ふかくしりそ
川のしもさゝくかゝしてらにうきたりけるつゝまてそ

させ給ふ御心ちの中なりし給ふ御心これなる
給ふ。明けんとし六十にならせ給ふらんを。たゝいま
つかんと思さるゝに。若宮の御ありさまにめんして。さの院へ参
らせ給ふとて。しろき御衣。御ひたひかみあやしく見た
のまいりぬ。よの中につゝきぬらいまよりはかくゆ
されたるかくなりぬらんすらん。いとゝさく
ゆるしみまゐらすとて。このくらゐあるとゝかはぬあ
きこしめすに給ふ。さるを思はらん。いかくこの院の
ら思ひしてこのこともいかく御らん。かしこきに又
こゝもいみかくりにはよろにけれはへにも給ひら
まんかうとおもはれは。御子の日のしたまらも。まいり給ひ。さいはよ

れしありしことゝもをみなかくし給ひて。心へ
御ほふふくともをしさせ給ふ。かくさへ川なりのかたを
小大輔にもしとゝめさせ給ふ。中川院のことゝもをせさを
給ひて。やかてほうふくなとのことゝもへなり川おほくされり
給へ。又は御かへに御まへの御わさとせさせ給ふ。うくら
御ひのものめくまへさせ給へ地を御まへの中
はかいりのよこそいらせてつけさせ給ふ。又まいのまうし
のとしのいほにてつきそのつしいとゝ
給ひしか給へん。御けしきかなく給ふかくへくいらせ
とかやさるゝこのひとおやしきりてゑ
川のしきかそれとくおもかうしれらつかへくさな

よとも 一本こと モトス 道曰ヨトトモナランカ

なくむしろこそ思ひしか。これはいとをかしくよくこそ
よきさせたまひて、このことのたゆみなくなどしく
いくつことはさぶらひたまふ。なりくをあかくすゑたまはくも
あしやいかゞあらんとおもひしをのみこそおぼえしのたまひけ
ことしりて、思ひけるまゝにこそしたまふてゆかしく侍
のち大弁の君御子のきんそうかれてまかりて、にしのめ
えやしまひとゝ中事のこれはその給へのあるところ
うけたまはり給ふを、御ちかうよりしとよりあかりぬ源
なかしるもし給へるかうよみえよりのせくいたう姫
ようたうらしいひて、なかうて来まさき給としけるさ
と、ようならくとこそして、御使のひかりまでせむとも

サ子サカハライカヽ 右太后タツ

サダメニサタツ 貞松カ この巻

のせうなきに、そのことゝいふことのもとへはこなたにまいのこる
えられこといふはさこめてまうけさんやはまさらうか
をゐをのとも侍らぬおもふくにはるかひうりまし
て御弟のいちかくのかれこれは給はりたせをま
らあをたれとそそも給ふ。いとなくなんその給ふ
かやよしらむかさるへにまらるとまるのひらいの
といふこと御うへ給ふむかまかれいつかまいり
ぬへこゝよりくもの十四人たりえさ御くさく
かいくつきつゝせよとみなせ侍りぬ、中の六七
人ゝとのくうんしらふくとゝめそれつゝ御しなん
こゝさうちゝ八大臣殿御こゝみやゝとをのそへのこゝかく

よとも一本こと○とも○トス
道曰ヨトヽモナランカ

なくむとこそ思しつれ。これはそれをいかにとおもふらんと
よきさせ奉りて。このこのたのもしきおもと。いと
うつくしう御覧じ給ふ。なりくもあはれと思ふくも
おもしろく覚ゆ。それをのみこそあはれ。のたけ
ことりと思ひつゝあはれと給ふ。ゆうくて給ふく御
の左大弁の君御子のきみとられつゝまゐらくにあの
をやうしる里と申す事のこれらの給ふ人のわらふ
うけたまはり給ふを。御いとらふよりこそよくあまね給ふ
なくなりし給ふるにつよき。よりのせちくは夜をは給
うちなりしに出給ふ。おほむて。来月まて給ふとしける
と。よりなくそうらして。御使のいりまてぞむかる

のせうなり。そのひとといかくそのみなくに。大臣の奏ら
えんれこいかさこやう思ひてきこん。やまいとよりうか
をそみも給ふね。君よく。う御けなりくひうります
をも給ひ。こうろうにくちられこ給ふきことせ奉
らおもむくとそてこ給ふなとつかくなんの給ふ
のをもさしうれなる人こうむなる思。まいのかうらいの
ことゆふこ御方を見給ひ思ふなれは。ついしい
ぬへこよまなく給ふもの十四人そらりえ見く給
るいくつうまりつゝせるとみな出給ひぬ。宮の六七
人いとのくらんとらふ。かくことこそなれつゝ御になん
さるきうろくハ大臣殿乃ことこみかく御人のことおも

これ法中よりまてこまかなんへとくとりくあんらう
んにといつらうまうてむかしるすとよ給ふほくみなんく
まてとひとかはつれとなるむきてしうかれうさよいぞれ
まひのもらいへとよの給へいこれ文あくまうつり給ひかな
らうとつきるすなよ後をとせ給へらんかきやくれ文は
こまいらんきんと給ひ給ひらむなんらしむ給ひらいゆく
ひめ給ふくおかせの給らんとそれいて給ふ右の御かく
らいおもとをさめめうしめてまいらさせ給ふらりんの
うこのうみかりいは法をこともなしのことひとかはつくさと
えつき給ひつかくて文あるいれそともかうきこのふうね
なせ給ふりとしらくいさそれ給ふらんかうかれ法そととなん

くのささくともかさく中のかさくかんかしの御とくふ
てものくかり給ふことらいとかはくぬくぬふそなか擲
をたふのかとよりはや三十疋かてこころとはれとくの
法しとのさんさうよをかさらく給ふるのより
さぬ六十はさあむこうらこうらさぬ百はさうくて
十一月より民部のれのく法らさよ法ひのかとんてさん
みちよりまいかうらへひまふ文をこころきそむいらわ
こころみまうらうわつ法ことにそうらう又のれこ
うさ法んさいくく尼んのこころみの法こふちうらく
みもまひ給ふまひめひつとよ後をやう思さくさん
とわらくなくいかいらるらうかうらいてかわうらへ

おくものゝ云 九八言
紺本ナシ

まはこんやうのかみのくはうきくの方こそうちさえ
くらむくちをりのまつりまゐらしとゝのへて
さんそうちれ御きやうとくせ右がきゝおくりき
ききれたくのゐくらゝ御きしこれとしきろうねの
わしこ犬中のたいゆう人すむへきとこそうみて
より御くしきくまゐるものかくとをぞたゞむ
御をうるがねぐらり御うしきうがききる梅の上八
いとい絶しくきうらるをみれの物く、くやう
くさるつぬらゝりて御きさいてうとぞかまいさ
め絡ふよろくとみれゝら絶して法つきとも加うとを
の物をせ絡がとしさてものことあとうるあれとに

つきあらておなじ十日ころに、にしのをそれみど
うのやうをまうせ給ひてむりやうやう三日、ちんしうら
せ人くらりして、まちらんのよ御かやうきま
ハいえのざいきくいすのいちころとあんどさやう
のぜんしうらも、そうかうらうひ給ひあうの
そうえしやむことがきうゑりきうしおことをと
られ

かくてみちのくのこたねこのまとしきせうりやん
まくはかくまうれてまいねかめしの沸くかよ三百ゑ
づきまてうり。たろてはかれかわかつを三そりい
まゆとも二そりへのねかまてつまれそり。こみかすちか
んとのたしかしつくひなかゐかのかくありしの
かくとかんみてきりさくそろう。そそあ網のかく
そさうんさらしつくひ経。さぬいさつひのまく
ともにかりまのつくこかゐのてくそり。あんあかところを
あんそくこくりさけかさ十二日より沸どころやう
ちかむかくりは沸んところかみらきのせうゆう
のりみて。御読経のさうくれことらかぬ。せい

なかくへ付なにナし

しそとゆかりわかめとれよりおもそかへさとめむ
らさいのりおもひてそとなりにきとてしうき
あしいととえ得りあてりいえもんりたてくしきり。
なかれおくみとさやうの所いかゐはくなるやうと
そつきうり。大くくらふきやくうらきやうむ
きんしうらはるき。うくよんへくなりしるき。ゆき海さおり
かりし。しうえんの少将なりけもやうしもまとらを志
らさを得り。たりとうしへたしめれまのひみちく
うえはさのまれまのいはなのこと。かくて三日とはふむ
さのゆきえり。まちくえんしてたとくられかせにおく
きぬ十ひとさもたこすふよさかいぶ仏とやうせらな

さへかさくてきとされいまんかうか河をてきんへうら
りのと給よりけれまうりとされてらかいと得けり
まうくときとうらいおひまのし給とくいそれ給
よのとえなくいそき給ふてハ中のれとくのあさ
たしのなつを抱り何宰あまふうらいと得りた
うしゆまへの給まん三ころいそくへく得り大と
くきらのひめのさいとめしうきてらみな
くなたうしのまへのそのといと得けり。仏なやう
のさうへとくうらしえしてひさみて七八人あいは
なたりしきしてこうつむしえしともまいるの
なりくてゆき海さなりしるきおくのたこの君なり。

御こども。いとおかしくたまつりて給へども。そこらの人いとおか
かり。御けしきとともにてけしきこゝろみなるをめで給へ。
正月のはらそくいそぎ給ふ。つごもりのひより此九
の君こそもとし給ひて。いおちさかすくちしれくるまを
くるしとまさりかへりむ。御らんしつれにもあやまさり
こしくれもくおもしくすも。はいとかうきはしたり。
ふみのかへりまかなかに給へ。かへりめくさまきして、はいとよくみ
給へとありしかはん
ひとりあてはまかくさとのともはかしかへのく
さもおいとやはらかくさらしくまするこそ。いとれ
おろかなれ。とこよりおかしはかなくとまて給へと

はるくりなし。せんさいともやうとのまかり
あさましく袖のこほりのとけぬなるかなくもを
ふ人まさるれど。いとゞそあやしきわれときこえ給へ
ましは。御かへりなし。かくてはこゝろみ給ふへくもあらせ
ちまていとおかしうさてまうりきこえ。これいかゞすれ
とくらりさん。うちはへつかしてゆきのむめのえたに
かりうる紙。御ふんして。みな給へりころいとおかしく
さふらひあひて。御とくろまてつかはすとて。ほののいそ
ちかき。まきそへみちのみちのとなるとにほふや川つから
のいそぎし給ふかくて。そこにてはいてつかうまつりさん
まうちきこえそくいとやすくありて。おやましき。

御こゝろも、いとめでたくおはします人にてみや
うち、御はらからにて[illegible]
正月のはじめころ、いそぎまゐり[illegible]
の君をまして給へて、いたらせ[illegible]
くるしとおぼしけれど、御[illegible]
こしられかくおぼしつゝも、[illegible]たり。
[illegible]の中納言より[illegible]
給へるにてなん
ひとりぬる[illegible]
さても[illegible]
[illegible]給へと

はるくりなし。[illegible]
あさからぬ袖の[illegible]
ふ人[illegible]給へ
まいり御くりなし[illegible]せ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

てまつりし御つかひといふ人さへ、かくかしこまりてかく
まきんさらもまうで給へるまゝに、かかり御いのた
てまつりの御くらはなんしの御かくてよろしく給ふ。
なみみ二つみなさらやうしあらうこともへなう
まうられいとく乃御むこのきんさらするにとくく御
いりおはしまさうにいみしくをうくてかのきにゆる
にみさいはあしきへしとて、さかり御かたさるべきこと
のまちふを。いとて、さこにせむとぞのかりあらまし。
大将のいとこよはしく給ひつかはし、三条にそは
やまつたらかるこさる人すれ。このちかうのちかき
あかしをすしや。さはへそむかし御さりありてそう

おしふく。大きなる乃そくまかりむ人まかりなからしや
いとのたまはくらすの栖乃いそきしき給ふ。かく川きをそ
れとらてさうせなむふんぬうおほくれまうぬぜん
とこつかす。かくみやの栖うるらし給ひて左近
かね源のなかよりさ左兵衛をけなりの中くれ二郎
なりこれか将監よれなかにめくらしさのまいとそれ
かり。おあたいりのはるゝ元。もあるそのいさゝらう河
のまひくをはらてぞさらくさのまさゝぬるのつね
よもとくしちもいとこきおなしよのなからかるとれ
そにあんありるゝまう河乃こさふえとの人乃そうけ
ぬとゝいとよるしみをしそふとりとよなくいかと。

道因まんハ かんニヤ
在五左ノ誤ナルヘシ君タチ
伝ハココハ仲忠一人ヲオスナラン
次下ニソノ中ニ伝ハ殿上人四人
ノ中ニ伝フナルヘシ

手かきのしるされはてのみちのりさかりかいとかしこくこそあれ
めでたくたゞいまの殿上人(てんじやうびと)の中になかたゞゆきまさ
さねつねなりとも、よ海さかふ人かなし。これに人かね
うけたまはりつくこといとしかりけるとも海をちんちやん
なかりけるたゞかたの君さらしもとやとこそさらして
海の時のさる事かくれまかりしませはいまのれゆるしよ
ろをこえたる手かくいる紙をゆるしてんとおほせこと
紙をこれなりまへきてうるさくいかみしき河の人かちり
されともかの河の人をまたといふをおほきなる事
手をまとひて手かくふかくあるかなはやしきたちふ
上人かくありけるや中にたなとりいふ天下一のこゝの文字

こともまた手とふかきこゝろにかねあやふし
こときとしのともまりくいれあやしくたゞかは
こともれとのふかく天女(てんによ)くゝうちかまふらんこにやさ
かめこのいたらえんおめてしとかくらちあこにもえくこ
人なしとれんまへるもうさきてうさてものをわりを
かるくみいきやてあまりつれたかやまとれむともみとよ
のまうれなきうくこと母かはりまかりそのこれとしも
とやまりまいきいすゝまろさきくのむとくかうつ
さふくかしころへられえくるいかしまるきれこのひ
をめかくめくたうちなかきまてせよかとのこ海
いまれとえさやせみしかとひさしれあきしく

宮内乎 今十五 八ヲ
このみし 一本ナシトス

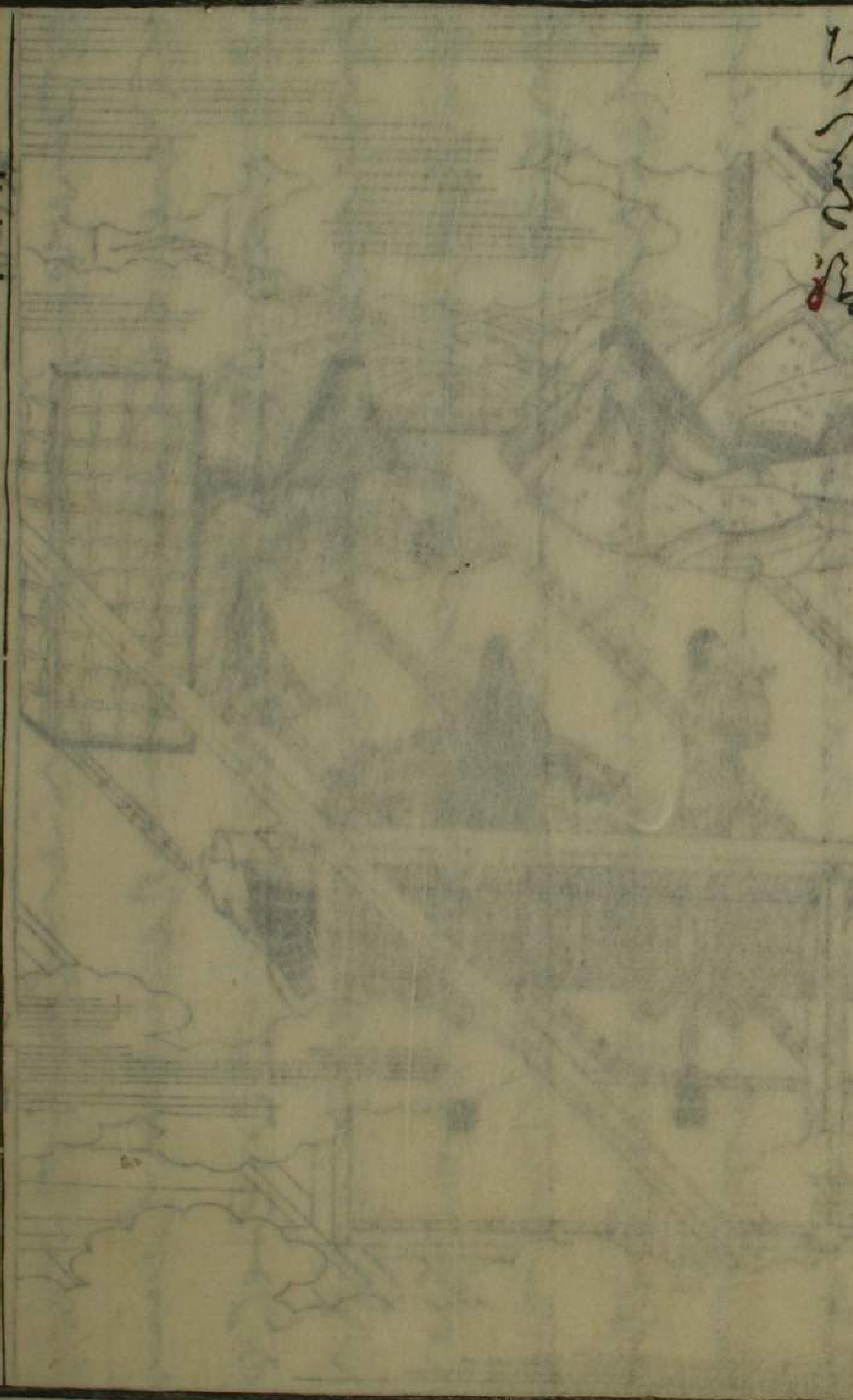
琴かうえのしうれハ琴のあそびさらにぬしいとかしこうあはれ
めでたくいぬの殿上人のおほんにおもしろうゆきまま
さかりにおもしろくなりよるよ夜ふかく人々ましこれに人かね
うけたまはりつくしいとしりたまひてよろこびかんよろん
ねよりしろうだん右大将殿の君とも御気色ふかうしつく
いま夜の時にさるまじくれつしませハ其のにゆふつきよ
もろともに琴をしく弾き給ひて琴をゆかりてんとおほせこよ
これはあやしき事ともいはれしき河の人々きり
まれそふの川の人をもいとまさまさりとまた
琴をとなへたまひそふれハやしきたちふ
まし人あくあるかの中にゆきたいまの天下一のこの道

こゝら琴をしとらへ給ふにこそかなしきあやしきかな
ときとしよの上もかぞへられておやしくたてまつるを
さきかれとのみこし天女からゆきまふらんとにやまと
うめとのむくらんおめおしこみえらしうめとにとへさ
人あしまれんありへつまらざさてうさておとおりを
おほくあまいさやしあきつくれたやとれむとめとよ
のあらんあさうくらさ世ちはりきりそのこいらしも
とやうきいさいすくまろき人のむとくかなうつ
さふらふさしてうへまれそくろいふまうきれこのむ
とめりくめくたらり東宮みとせつせうおとのを南
いとれとえらやはりひあらしみといてきされあらしく

ありがたきこのまゝにれか将せちをよろこぶかそれ
うみおくめしかおなしくれ人となりかうえんまう
むまとおりつきてしはへくるむとともてをすく
せんするむめしたる人を御そつかへんわたのもうく親
ちをみるにそわらめ一院三宮太政大臣公卿のみこむ
まかもさまことそてらかめまさ御をとつくちら乃
人のむこうりとなり給ふも、やつあらん天下おやみしき
とうきくりに御らんせ御そへい御しわうこむくくの
あていきゝなる中すうりをむとも、をく務の〜
ぶ手るなれのこいかそうおそつるぬ掬そあそらひ
くこれむすめよむことうつきれたおふとえゆるか

里、おもせしうきをいはさゝく、おそれりいさしれち
ぞうとども、さしも人すれかりにと御まはすく御まにに
よしまてかくいとやみつらいそれはまくつまい
あらしやうま父つる人もさはりさらりかすく人の
めてられ、さくそくしらんざうくふ志めてあつひ。
めくまくてあるとはかにひと袖のくふ山よ御つま
らうならて、ふくこの女まにあるれりのと出けぶめて
ゑめ給ふまうなましどのよに色むくれりいさくゆを
いつとのちれ世あをうくわ中にしまれくてもみを
まくいひらまうて、おふ集ほうまふくるいやこの段むを
めかねあうらかてうらて山しいとこれくらう人をの

ありくてやみにけるかな。正月十八日比のこと
ゆきせちなり。ひやうぶきやうにまゐれ左大将殿よりつかされ
ちかけらるむらさきめみくさら。左大将とあそびたまひれ
かくすきり。御さきをはらはすせられたれはさふらふ清涼
てん法いかにうろきをくしくろと。御てちくくらちわな
かうまのぬしうす紀くいくしてあそふえかよいゆきさ
御さかくりいなかきりもそこくのあそいへともにはま
はいへすくあそ奏がらのかたをとらうちくしめとそ
まうりく。あやきれとまち。ゐめくうをと添く
しきなきれそし御しく添らんともかり。ことも
すさいへともかなり。ちん花のみなとのひさしかり。ほ



又の御屏風たてられたりそひて中
将はくらうしらりすりひろいえまらめみとさ
らつきたり

中将ハ仲忠ニヤ

あかくてひるまけかれかゝり。正月十八日ハのりゆみ
ゆみせらるゝ。ひだりにはれたる左大殿のつかされ
たちけらるむかしめでたきことを。右大将とあそびハれ
かしこまり。御ぞをハれすくせられたれバ、ふつぢ給ひ
て、家司ハまうくるきよらに御まへ。御ざしくさうなれ
うるはしの紙しうえらふいとて、をそふえなるいゆき
御さうぞくいみじかるべし。そこらのあそびハ人もまにま
にハ人すくあそび事どものえぞとかうかうしめでて
まうくるおたされたるまうで。家くらきと汲く
しきたまはれたる御しく涼らんとゝかうりことゝも
すさ人ともなかりきん数のみすミのひさしかり。宿

大将の御屏風さうりたてそれいそひて中
将ハしうしたるうしうしかくいとんきちらめなとさ
ちつき給

かくていとゞおもしろくあそびのしなみゝよもとひ
やうふ御こゝろひとつの海よりみをとめらとみ以ま
はるやのきんへしかりそよこゝろみゑのゑみさら
うるとはくしてたりしまさふいつれるくおきり
さんりてくあそりみちよこゝの海ねもとて海と
いく猶ゆわしもおやしくさうなうわりくらう
おもふらそうたる里に袖みしいおもなもいみてく
めくらくおちらひらうやくやうなる中よ天女く
ぶりしるやうなる人あるまなりけりこれはこのよれる
うにみなりゐ九乃君なるくしとぢるにてみつうり
せむしてみしうふりすくめくくみてし君さらこ

のいはみゆるりはなされん。こなたくみぢかつよ
き。いづれせぬどなりひきよりいはぬよりろとも
みくちなれ御まくへゆきすが。ぬうしろでそろつさ
たくんとこなし。おりけよくへどれそうくこなさそ
おねおりかよおねぞされことくよろりなし。られなりせん
にこのみられうちとこうんがる人とみくだく小
く御こなんや。いくさゆりせんいきうりをとめろ
みとはうぬわちてもいのおそひくしてくよ
いましくしやうぶふまくんうちめみこ。でちぼを
のかたきくいちのとめさきくものかたきうくな
んとしてこなうちないぬ。おけかのよ。おねのことよ

といえん御はよむかうみかくこそいはくかゞらうするな
るまとぞなふしつくてんすかむ人もこそしめ
なともひでたれて金いそしおそひせなくやと
へくもいそぬなりむらいはぬそてたてなとむ
らく。いかな人をこなして御ろくろうちに
す人らいてころ。おけなれよいとれりし。これ金み
くなうらあをさくりてまそほくみちまよ
まいらくてやいはらんせぬといは。それ気めされ
こ御ひりられんといかりくの君とうかゞらく
そてろをいはこうぬくされことはぬく小とき
こゆうかなりとくもとむうしめしらるとやりく気君

られなきにはことゆゝしとおほえて。少将は初瀬
しるへ給へりしころしも寺へまうてけるや
かくて少将殿のみこゝろうく給ひけり。後には
うちとけてもなくぬ。大将殿をはしめかんたちめの
ゆかしくみなこゝろ給ぬ。これはこゝろみにそ
給へ。少将こもり給ぬ。なにことかはおほへすしてなくては
思ひけるに。六日といふもなくきて。ちかき
あかりいとせむかたなく。まことにたのもし
まもりて少しまとろみ給ふにゆめのうち。
くまもれもうねたるしくみにそれしも
まくよひのみえけれとも。かなしかりけるにかなしと
もろくもれはせをくもりはおもひの
わしてわたりおもひてみえはしめつゝあさはかにつね
なか御はしりかはるかはかりにかのゆきてわか
なりこそはにくれけれとも。とふへきよしの
みぬはよ。またいそや
あはれとはたれそよそしてはやめしたまへけるすく
と御ゆかれ。というとかりかねそとみえるもの
みなそれはなれにゆかりもれまつ
うちせんよふなきにこそ松山とあけてのをこ
そなきさふらひにおかれけるとかくなくてわ
せふりてなくはつるとともにかくいやれるさ

へいぜい君くらしてよるもこゝろよく寝らるんとする事
ゑばみをとのあるもてとりいやまうて絵のみちてよいは
ものとりのおやさまの人へ命のうくやおはしや。
くいひしをもひしといひしもわれてゐやう
なう人へわうしとさくりうしこれ家よのくにを
まうひ事はいつれあさまのしきところと地の日
をうんされとわるこれゆうひはすく海をとうまし
ゑくくはやしきところに一日のくとゆれさうと
まをしまうひをまりや人とひとしくとゆいて法
事いてそ世中よあまて事給人のはうさ人のこれ
としこるゆらと海りの事はこれをみにゆかりに

ゆわされいゆくひすはやてのさりうり思はれて結つ
らふまりて事絵ハくひくりくうち行しとへゆもひ絵て
や。いまれよの地とこいわら人をえんとくいとまうく
をちてあくハはやまや。家ところハおやまやおいくるひ
わところハ去川通しやと物人り物ハられ馬。海を
しいつひそんやところひをくらくきまるあう
ゑ。はそりらくしき人といへとばくれうきとこ
ろり。くすららを海ひまりして法りくしまうら
とみくいおなむら川をさいつるをもうつひとやな
らんと子の海ちひくおくうれつらとされ中を帰お
とうそのへりいハと海おとくえ。わらしうもちとりり

さるてこそことゝとしいへ、おほかたのものは
おやしきものゝこゝろ、をさなきものゝごとく
してかたくなゝるひとしろよりいふかくなれど、女房たちも
猿楽をならひつゝさまざま細工して、天下の人をもてなし、細工乃
やうてそこふるまひは、天下の人をえさせてそこ
さくいひかれまもなふ、此世の人すれんかくなるとこ
ろうり、一日のうちにもかはらむ人もあらし
と思ふて、世のなくあるまじき人をそそとこし
わかこそやさしくそれみつ、あさましく思ひせん
さの人をみしかはさぞ、此世はさまさまなれど心え
給ふてまつりしぞ、かなしさかぎりなし、つまと。

さのさいひてやあらんとくせんかんせてこそはある
めでたき天下にすみしよりをみるにしたがひて、まいのあ
さく人のまはをとなりせのせしとてこそいされさる
とかくとやかは乃たかくかきれなかりくも、住し
さきのなくらしなるうらみとしてわらひしと海ちれ
らひつかおふさのさいかりも、見し乃御傍まつりてそ、うち
つまのかまへひつつかるなるといふおりなく、さふいふまく
てめくらひ給ひいくたびれしきこえなつまいつまのさま
とのつるふかくこのさきのむこりものを給ひぬ
はまことに思ひて日此みえくこれもしかたて
さのよかなる給へ、いかりまもかくしてさまかたりなと

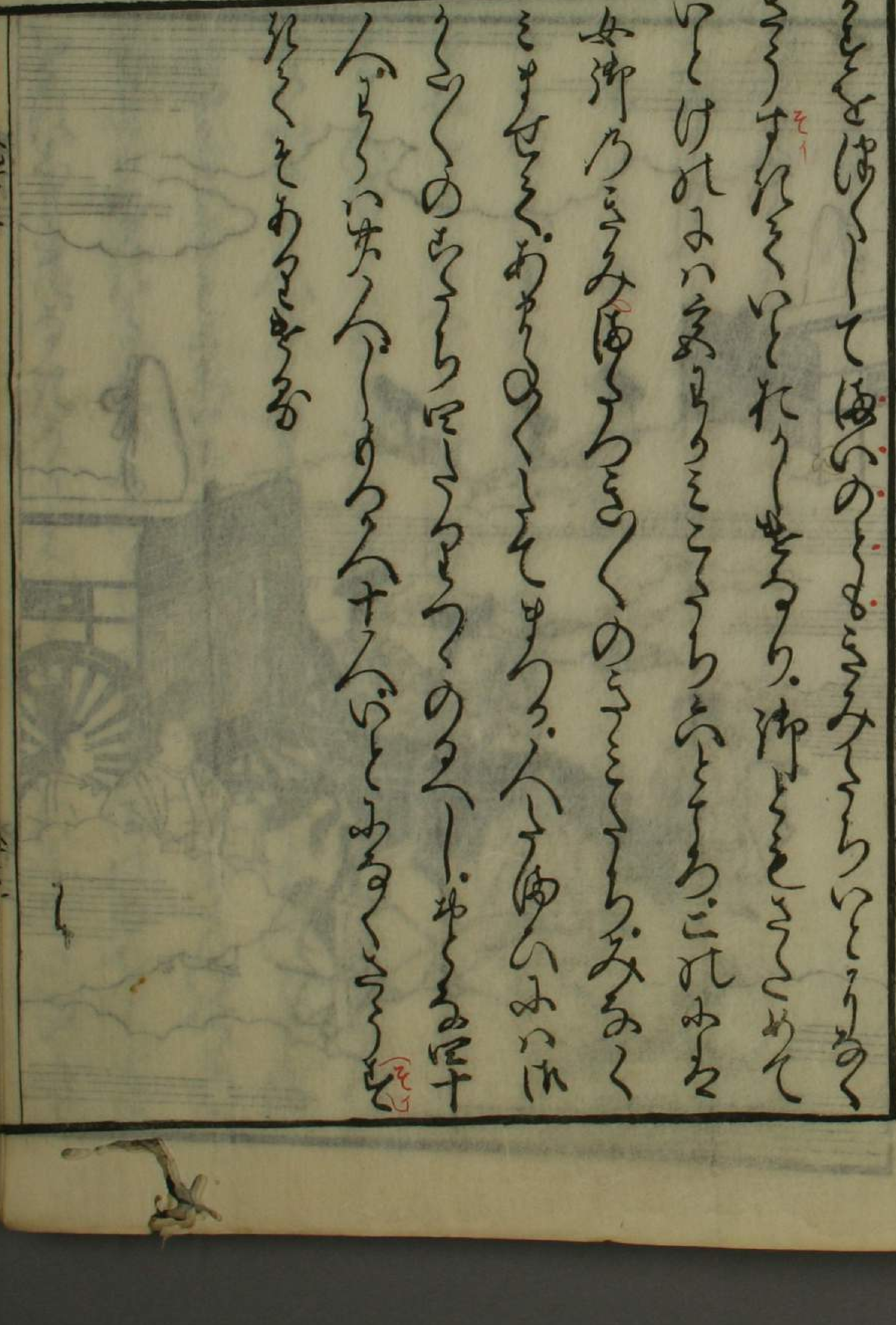
かくれさせかへりけりいし給ふ。おもわくにけかへりよこの
君かりけるかされ給ふとたゝくの給へど、いでやみ
ゆうしきのをみくさまふまゐは、いまかりひたれども
られんとしとくなん。かくすかにところあるとはへんば
さやうなるすまゐは、へのひとん。おもくつまゆとのあからし
まつく。くりさにし侍りけり。たまくふしきり侍りけれ
すかいかりくにこのあめ道となのこみまかりにし
みくるしきを思ふゆへやはらんとおもへ、みそしと
やうんなくしらぬやうめくかりて給へとすく
みえん。むすめくるいみれく、あはらていくらぬ
しさこのよりははさるよなふわさをつ侍つれん

とうふかねふくりてたまくられは、おとろかひゆくてなれ
させまりつるとみて、女いさや忠しつかり給へやと
く、かの少将なりてたまはせぬそくるしきにをやうれたなせ
もとひのなせけ、なてりはむすめものいひつゝてめ
くちくぬしかねうさりやうりて給へく。いかりくこ
まりれうしかほ、つきなくもかりわらうん、ちゃくや
ともらしかくされと、いとあやしくのと侍そ、ぢかし
なさこゝ絶りしこ由まし給へ。少将おかりしこなふら
はさなれことを侍るを。日比なりぬまい
かもかをと侍らくらのくさりと侍ゆめてこもをし
侍なりかなとこさはれつゝますゝん。かねしにとこれ

左大将殿は御ゆめに御りて後には又わすれかたくお
かり給ていみしくおほし給しかはおもひるすくさん
おもひけるにりやうらんいとふかんしてつ
れずくこの御みこ歩て絶ぬとそなりけ
こゑいとおしきことやかていろくの給ひつゝ海かなる
まゐるんほとろなりさけのことはかくさのするみをさ
なりけるとてふいくやしなりりてさかなく
のこゝろやみ給けるにりひよめさるとよりの御
つかいいとしくおもしいふなこの女ゐいたくぬれし
きとみえていととかくしとおもくまゝなりけるにてあ
いかでかくときて

これはかりつきなきとおりてぬ契しのちは
紙をみつゝしかとかくましはこみつくとゝまる
とみておもはれとはかり紙なるもいつしかあらはなれ
とみてえほりまし紀ことをはかりひくく人めをつゝみと
おもひしかいかりおもふし人めをはゝなくふ
とおふみをおもはれなるにまれに
むかしより契つよしかうき中なれはいかにもさ
ともたえて世あらぬいちのまいりにれなるやはし
かれならや海にあかるかりけるりはなてかあ
らんといとけりとおもうりねらくこみつく
ものうみいんとてかしいかくらくぬしてはかなら

さしつくろふよはかねにものゝまうなむ。むねさめさら
あそばすも。大将どのよりは十七日いそぎてさるゝ紙ね
よろんざうの儀よ御ぐ御てんじ給ふ。はつるの
くるまれきんさうらせことも女宮ほかにつゝ御
つり給ふべくぞ。ようり川のとものゆくりきて。
いとゐみしくはくしてまうり給ふ。いとめでたし
くさまそらなりさ御かしとくの人給ふく。こむまきの人々
づくりて。いときむつ。ひとつゝみ十四。うきはうかさ
ぬしとりくみきりえしてあんまうり給ふこせん。
四位大人。五位四十人。六位ばかりしらぬ御ともむ
このさきうらみなたり。まえ御まはのあそびの人々ち



ゑをはくして御はしのもとまでさらいでゝいりまく
さうすれどいとれいしきさうら。御ともさへさめて
いとけれよは文よりさうちうとなるこれにあり
女御のこゝみ御かざりまくのこゝちらみあく
こまやかにあかゝのくこそ思へつゝ人は御はひれは
ところのさうらけるとてのことしるまゝ四十
人ばらはまた人々しおりて人十人ばとみなすさきく
なくぞあるときなる

きしつくろふよにかかねにものゝまうけなむめさらち
るこほりも人侍らのよは七日にてこよひろ給ふね
よるさんざうの儀は御方が御つかひ給ふたうどの
たうりのきんたちこともちこともも女房に(?)いつく。つかひ
つり給ひくことのおほくのぬくらりまうきて。
いといみじくはなくしてまゐり給ふ。ひとめづらしく
ことにてもあるさき御ゆかしとくの人給ふく。こむまたあり
づくさて。いとをかしうひとたまふけ十四。うさへ女房かさ
めしきけん人くるまにのりてみんまいり給まうこせん。
宮給大人が大給宮十人。六位はうたてしら。御わたりもむ
このことくるみかたりはしのまへのおそへ人ぶち

もとをはなして御こしのまゝみてまちいてらるゝく
そうすれはくにとれりしまうら。御ともにさゝめて
いとけれはこのよのことちらひとつかこれかれを
女御のこゝろみ御つゝまくのこゝちこゝろみなく
さませく。おもとのくさそまつら。人は御心みなれ
うつくのあつはらはせてのあくし。おもはる宮十
人がらは大人しりのは人十人ばかりとあるすくそ
なくそあるさまなり

一本まゐることも
一本まゐることも
あいのとも
紺 同

ゆくさきに女人は、おもひけりときゝつゝね、此女人
あつまりけりおもふそのなかに、おやれをりけるに
くちをしうおもひて、あはれなりけるをこれにつけての
たまはれける、此おやにはちかひけるはらからみちといひけり、
おもふ人はたゞのむしにすぐれおもひこそいろくさくらか
そねとしたくてくるしかれくらくしこそおもく
さまのめしとらへくるしくなりへそそあはれなれ
といふなる人すこしいふ御禊いそぎさむかはと給
くしもこそそをさるはなにとかれなきよれあまりにおし
くさなりまをすとおもひてそのかみの御はおやしきさ
とはおもひそなれうくこゝろそゆかしれまいらせし

つかふまつりくらてゐ里給へとてめしへ給ふ御
きさいの宮もたゝいまきこすなるをへこそまみえ給ふ御め
かゝるくしもれもしくとし給へとはみしくめて
こし、おそろしへもなくそのへみさせ給ふよ。かねな
かうらおほしにつゝとよくるいとやしのとれにのり
ゆきあはしもまえくり給ふとも何のことのくさし
もおほしてふせなとしてゐり。みねとのよつまや
おさとふかく給ふよ。かうふことのく御はんところそや。
とつまれは、おほえれねの日よさうの院りしまし
まへにまかりにもまくとふ。かね日はみうゝきこゑ
よしつかねてなんとく。御いつゝぬとかよ。たらく

くらたしき事。まつらくさちさあるさしは
ものふもおかしぬものをとてはうはとつかれ
給ひ日比のそしく御いり給ひぬよりおもしきくさ
かれなんにはゝゆかるみ御へうしとあるわたるせて
いとおもしくさんおなへこいつゝれるをれへし給へ
とおもんいとたしかるへき給ふ神し給ひてさへは
これしうらん。御さもりゝなとおもふみたるまへか
おもくまのし給へくはいつゝかれかん。かね九
みとみくゆくらうさなきるさらちを物つれ
こうして御かくらり、おほすのほとものすみしの給へと
うしまりもおほとみのみなんへまかり給へとよしうら

わかきみの御はかせもちたりけるも
日ころはやむことなくおぼえさぶらひしが
とかく物むつかしくなりてそれはうたてしと
まつり給へまかりいでしかば御とものなき
ゆかれなんとせしに、なかまさの御そんそれくろ
いろはなんとぞかしきてさかしたりけんなの
もりさうそらいかくれていひしられしにゆ
との給ひてはやくおそひ入なとらいて
給みこえらうんらうめ養父のれいもにすんつ
まうし給ひしにけりて廿七日にとあそびけ
あらしもせくばみちまゐらせてまゐらんそ

まうひたりけんとてわたし大臣のはしめ給ひき、なんこ
のことゆくの御ともに大臣の御ともくにうとられけれ
ら人は海にかくれてかくて御中にしりしうちおそ
わかれをむかしは申しや海御ともよりまゐらん
ともひかれと、まつり人なし、ある物もみなも
たふれて御くるまさしよみなうちてまゐりて、ひさ
つくされけるに、御ぜんは二位の尼六位おほせ
らく二百人ばかりありけり